

松島剛編

中華東洋歷史

東京春陽堂發行

中學東洋歷史凡例

第一、東洋歷史ノ支那歷史ニ代リテ尋常中學ノ學科タルベキ
コトハ既ニ我教育界ノ定論ナリト雖之ガ教科書ニ至リテハ或ハ
鴻卷ヲ過キ或ハ支那一國ニ偏シ未ダ完全ナル者ヲ見ザルガ如シ
本書ハ大日本教育會ノ意見ト那珂通世氏ノ助言トニヨリテ大綱
ヲ定メシ者ニシテ素ヨリ完全ヲ期スルニアラズト雖少クトモ以
上ノ二缺點ヲ補ハンコトヲ圖リシ者ナリ
第二、支那ハ東洋歷史ノ中心ナルヲ以テ本書モ殆ト紙數ノ半
ヲ費シテ其ノ政治、文明ノ兩史ヲ略叙セシト雖其ノ他ノ諸國ニ於
テハ重ニ目ヲ外交ニ注ギテ國民相互ノ關係ト種族消長ノ跡トヲ
詳ニセリ是レ蓋シ列國史ノ本領ナレバナリ

第三、本書ノ割合ニ皇朝ノ記事ヲ省略セシハ、別ニ日本歴史ノ編纂アルガ爲ニシテ、敢テ東洋史上ニ於ケル、皇朝ノ位置ヲ輕視セシニアラザルナリ。是ヲ以テ、其ノ重要ナル關係アルニ當ツテハ、毎ニ各所ニ附記シテ、之ヲ詳ニセリ。

第四、本書ニ皇朝ノ紀年ヲ用ヒズシテ、特ニ西洋ノ紀年ヲ採リシ所以ノ者ハ、世界歴史ノ一半タル西洋歴史ト權衡ヲ保タシメンガ爲ニシテ、別ニ他意アルニアラザルナリ。若シ讀者ニシテ、皇朝ノ紀年ヲ求メラレンカ、六百六十年ノ差アルコトヲ記臆セラルレバ、則チ可ナリ。思フニ、小學ノ兒童ト雖、亦容易ニ之ヲ改算スルコトヲ得ム。又々所々ニ皇朝ノ御宇ト曆年トヲ附記セシハ、單ニ讀者ノ連想ヲ助ケンガ爲ニシテ、古代ニ於テモ、皆總ベテ書紀ノ配年ニ從ヒシト雖、歷史上必ズシモ之ニ盲從セシニアラザルナリ。

第五、歴史地理ノ輕視ス可ラザルハ、何人モ知盡スル所ナリ。故ニ本書ハ、成ルベク多數ノ沿革地圖ヲ附シテ、讀者ノ參照ニ供シ、且ツ書中ノ普通ナラザル地名ニハ、皆省州國等ヲ記シ、之ガ搜索ヲ便ナラシメタリ。然レドモ、古今東西ノ各地名ハ、僅ニ十二三圖ノ能ク收メ盡スベキ所ニアラザルヲ以テ、編者ハ偏ニ教師諸氏ノ補遺ヲ仰ガザルヲ得ズ。且ツ讀者ハ、修學ノ際、各國ノ略圖ヲ畫キテ、自ラ地名ヲ記入ヲ試ムルヲ善シトス。歷史上ニ於テハ、地名ト人名トハ、殆ト同一ノ價值ヲ有セル者ナリ。

第六、從來世人ノ慣用セル、ブルメンハツハノ世界五人種ノ分類法ハ、其ノ憑據極メテ薄弱ニシテ、今日ハ既ニ廢絶ニ近ヅケルヲ以テ、本書ハ最モ進歩セル、ブリントンノ分類法ヲ採用セリ。即チ世界ノ人類ヲ分ツテ、歐弗、濠弗、亞細亞、亞米利加ノ四大種トナシ、

且ツ之ニ附スルニ、島嶼的及ビ海岸的ノ諸種族ヲ以テセル者ニシテ、夙ニ學者間ノ公論トナリシ者ナリ。

第七、本書ノ編成ニ就テハ、帝國大學史學科松井浪八君ノ助力ヲ與ヘラレタルモノ甚タ大ナリ、特ニ此ニ記シテ其勞ヲ謝ス。

明治三十年一月

編者誌

中東洋歴史目次

支那歴代沿革略圖

第一編 上古より周末に至る

- 第一章 地理及人種……………一
- 第二章 三皇、五帝、及夏、殷……………七
- 第三章 周室の興亡……………一二
- 第四章 三代の文化……………一八
- 第五章 漢人種と四夷との争抗……………二二
- 第六章 印度の上世……………二五

第二編 秦初より南北朝の終りに至る

- 第一章 秦の興亡……………三三
- 第二章 西漢……………三六
- 第三章 東漢……………四一

第四章	三國の興亡	四六
第五章	兩晋及五胡の盛衰	四九
第六章	南北二朝の對立	五三
第七章	秦漢及六朝の文化	五六
第八章	海東諸國	五九
第九章	北狄の跋扈	六五
第十章	西域諸國	七〇
第三編 隋初より唐末に至る		
第一章	隋の興亡	七六
第二章	唐の初葉	七八
第三章	唐の末葉	八二
第四章	隋唐の制度及學術	八七
第五章	隋唐の宗教	九一
第六章	海東諸國	九五
第七章	西北諸族	一〇〇

第四編

五代之初より宗の終に至る

第八章 西亞の形勢 一〇四

第一章 五代の交立 一〇七

第二章 宗の初葉 一一二

第三章 遼夏の興亡 一一七

第四章 金宗の爭抗 一二一

第五章 金宗の末路 一二七

第六章 宗代の文化 一三三

第七章 高麗 一三六

第八章 西亞の大勢 一三八

第五編

元初より明末に至る

第一章 蒙古の西征 一四五

第二章 元の興亡 一五一

第三章 明の初葉 一五六

第四章 明の末葉 一六一

第五章	元明の文化	一六七
第六章	高麗及朝鮮の消長	一七一
第七章	西亞の大勢	一七六
第八章	南亞諸國の變遷	一八二
第六編 清初より現時に至る		
第一章	康熙乾隆二帝の雄圖	一八九
第二章	乾隆以後の清朝	一九六
第三章	清朝の文化	二〇四
第四章	英領印度の興亡	二〇七
第五章	後印度諸國の運命	二二三
第六章	西亞の大勢	二二九
第七章	清露の衝突	二三八
第八章	朝鮮の獨立	二三三

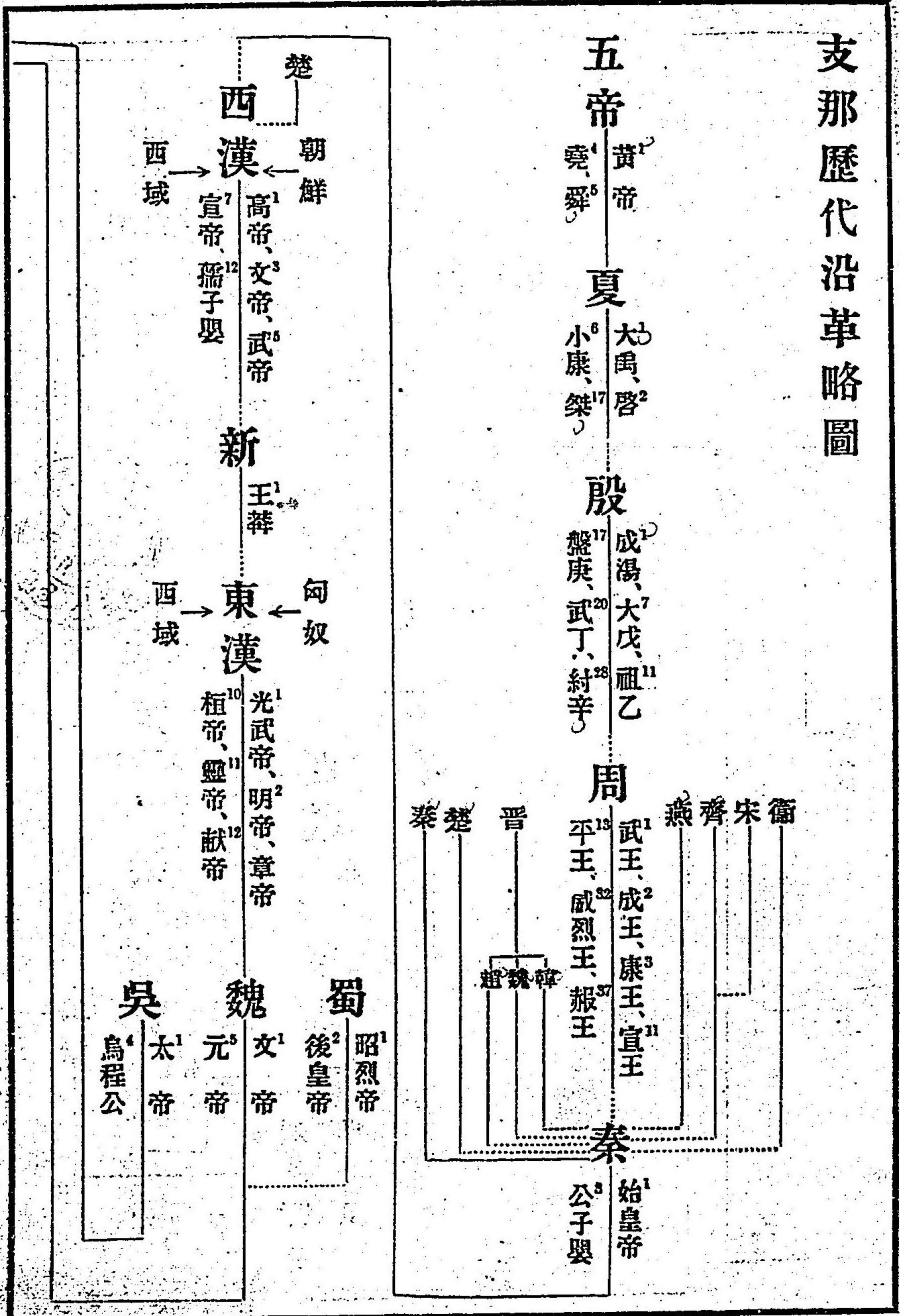
東洋歴史地圖目次

第一圖	亞細亞全圖
第二圖	支那三代圖夏殷周
第三圖	戰國七雄圖
第四圖	五天竺圖
第五圖	秦漢圖
第六圖	六朝圖
第七圖	漢代亞細亞諸國民圖
第八圖	隋唐圖
第九圖	唐代亞細亞諸國民圖
第十圖	五代及宋圖
第十一圖	元代圖
第十二圖	明朝圖
第十三圖	清朝圖

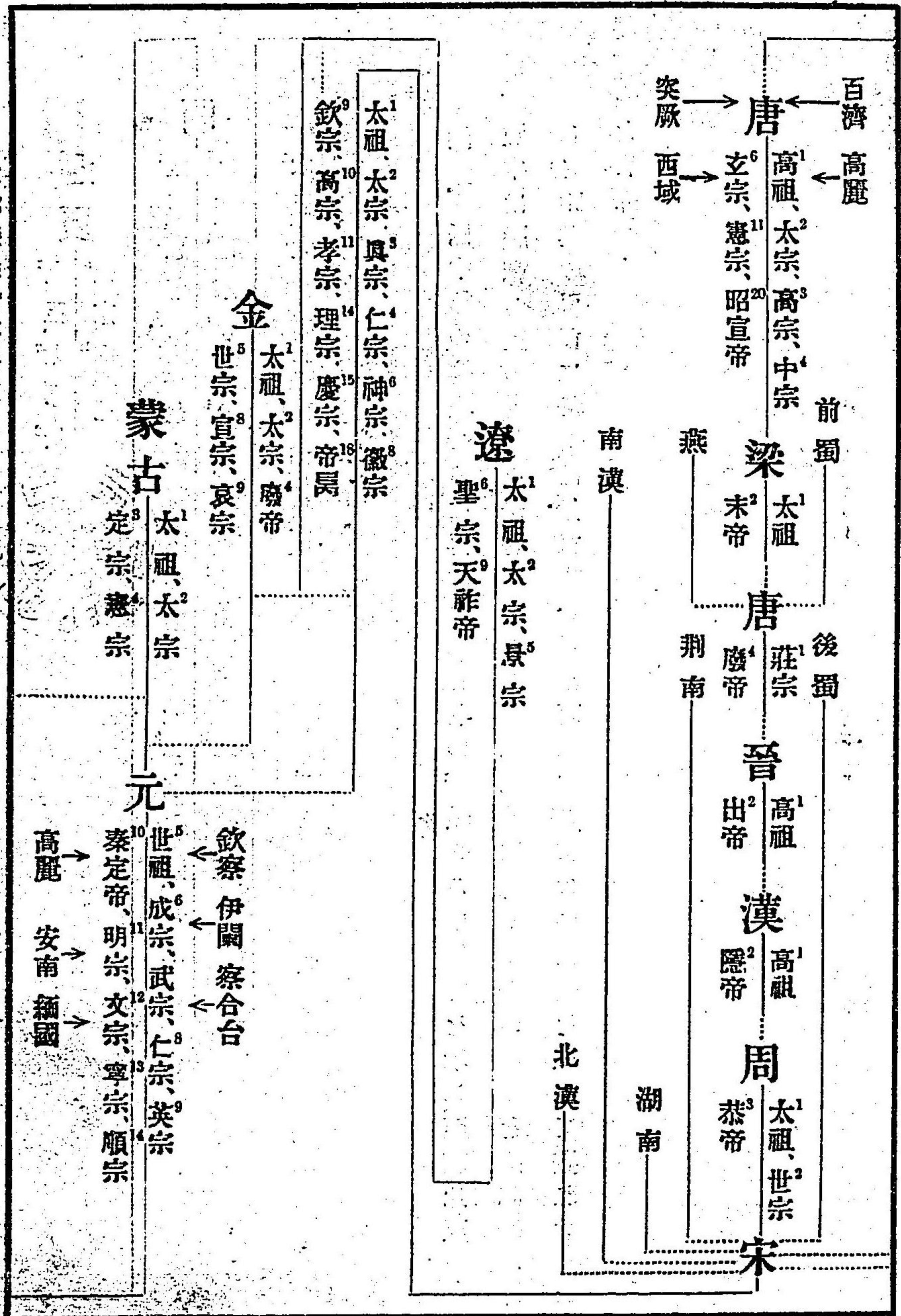
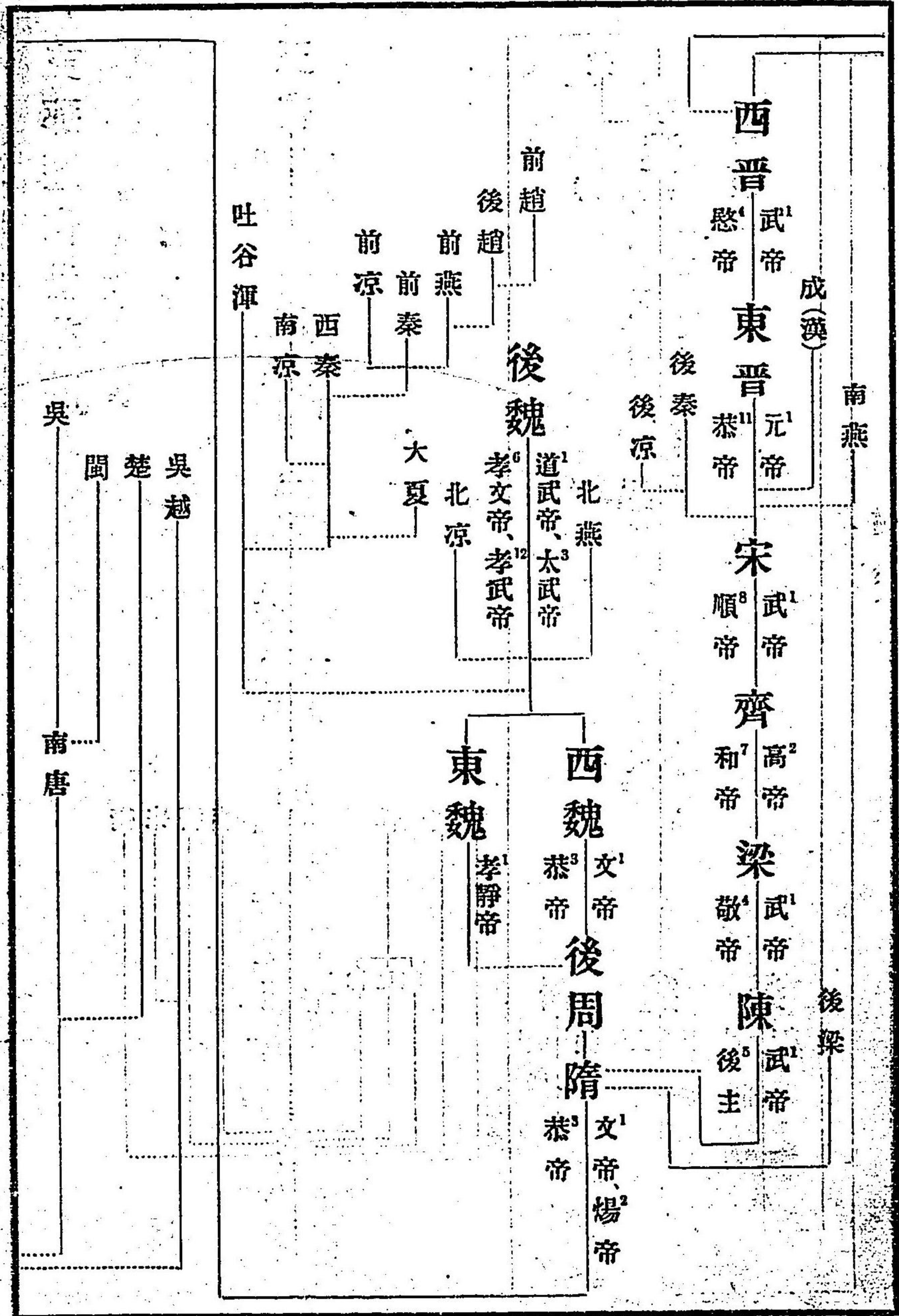
東洋歴史挿畫目次

- 釋迦の像……………開卷
- 孔子の像……………二一
- 印度上世の佛像……………二九
- 孔子廟の圖……………三四
- 長城の圖……………三四
- 印度古代の佛堂……………一八三
- 安南古代の佛殿……………二五一

支那歴代沿革略圖



支那歴代沿革略圖



支那歷代沿革略圖

西夏 太祖¹、太宗²、景宗³
桓宗⁹、南平王¹²

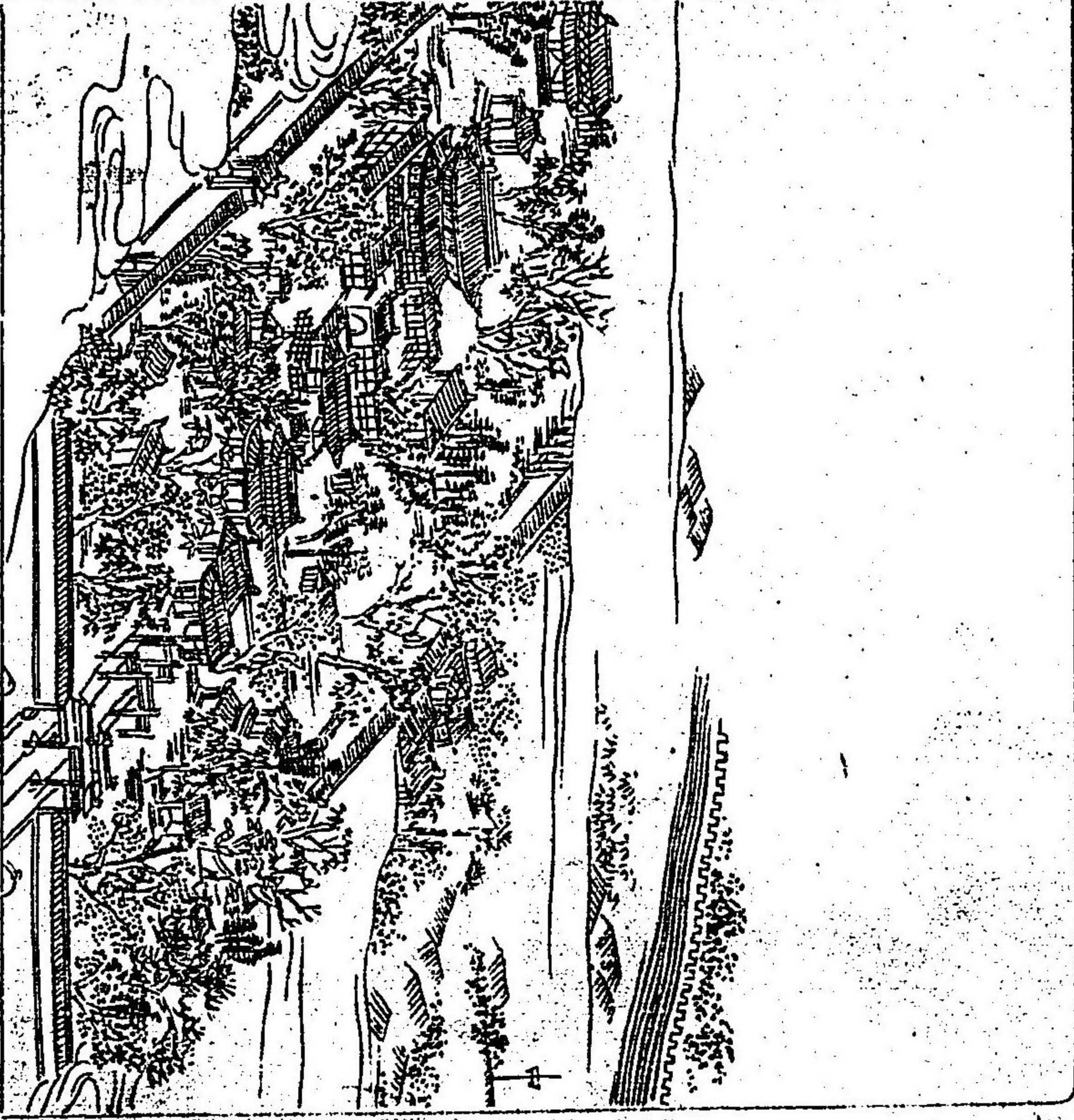
明 太祖¹、惠帝²、成祖³、仁宗⁴、宣宗⁵、英宗⁶、景宗⁷、憲宗⁹、孝宗¹⁰、武宗¹¹
世宗¹³、穆宗¹⁴、神宗¹⁵、光宗¹⁶、熹宗¹⁷、思宗¹⁸、福王¹⁹、惠帝²⁰、桂王

清 太祖¹、太宗²、世祖³、聖宗⁴、世宗⁵、高宗⁶
仁宗⁷、宣宗⁸、文宗⁹、穆宗¹⁰、今帝¹¹

注意。圖中線の連続せるは傳承を示し、其の断續せるは併吞を示し、亞刺比亞
數字は歷朝帝王の代數を示せる者なり。元以後は悉く諸帝の廟號を列記せ
しと雖其の以前に於ては始祖末帝及び著明なる帝の外は煩を厭ふて概ね之
を省略せり



城長里万



廟子孔



迎 釋

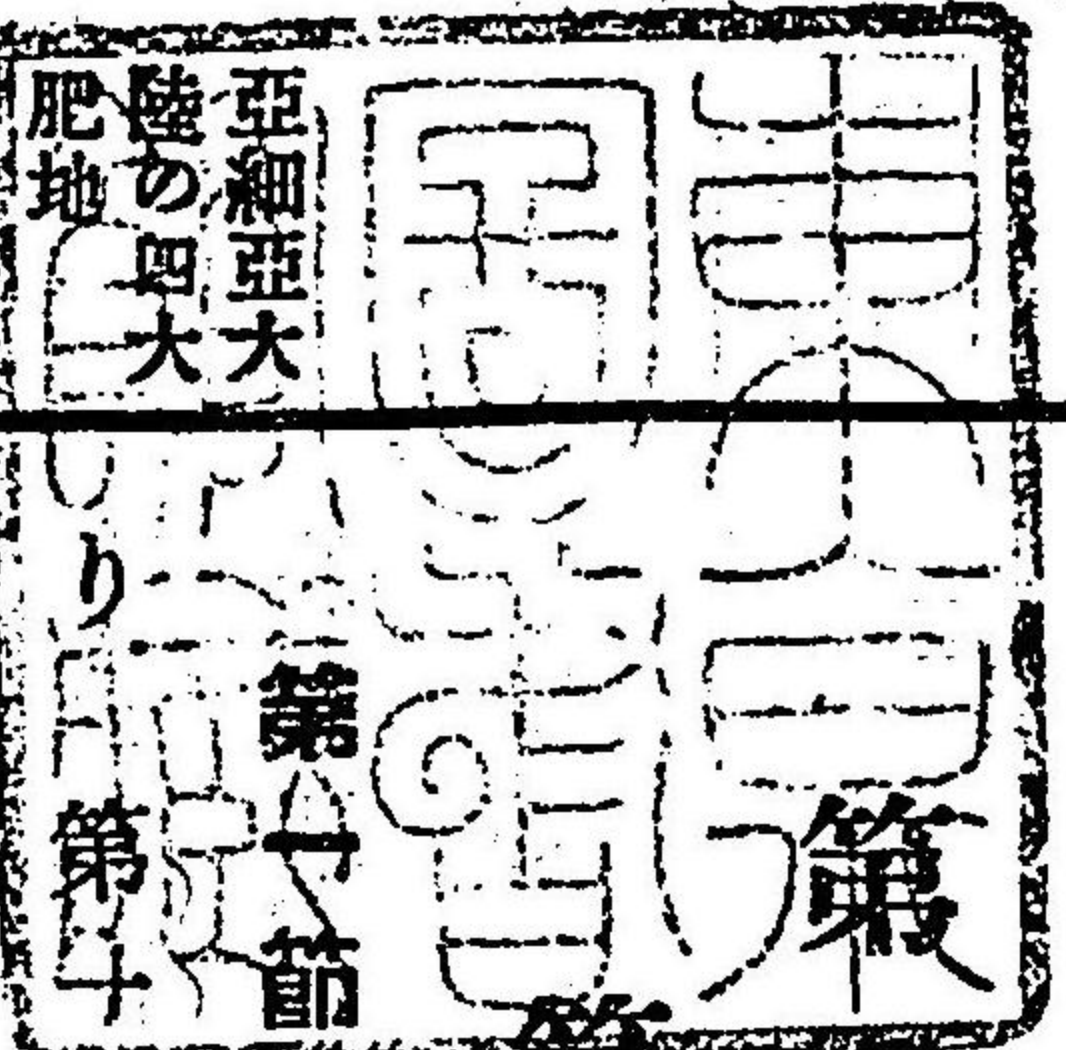
[Faint, illegible text on the right page, possibly bleed-through or a very light print.]

中學 東洋歴史

松島剛編輯

第一編 上古より周末に至る

第一章 地理及人種



亞細亞大陸に四大肥地あり、皆嘗て國民幼時の搖籠たり。第十節は太平洋の水域にして、黄河、揚子江の二川之を灌流す、實

に東洋文明の發生地なり。第二は印度洋の水域にして、ガンガ、印度の二川あり、上古印度の文明は此の二川の賜なりといふべし。第三は アラル 海の水域にして、シル(ヤクサルテス)アム(オクサス)の二川あり、支那史に所謂西域諸國の興亡せし所なり。第四は波

以下第一
地圖参照

太平洋の水域

第十三地
圖を参照

斯灣の水域にして、チギリス、^{ユーフラテス}の二川あり、カルデ
 ア、^{バビロニア}等の興りし所なり、
 第二節 太平洋水域の地は、世界の屋根と呼ばる、^{ハミール}
 高原に起りて、東方に傾斜し、北に阿爾泰山脈ありて、北氷洋の水域
 を分ち、南に喜馬拉耶山脈ありて、印度洋の水域を斷つ、即ち現時支
 那、朝鮮、二國の分領せる所にして、東洋史中最も肝要なる部分なり。
 支那は大別して、支那本部、滿州、蒙古、伊犁、青海、西藏の六部となし、
 更に行政上より之を小別して、二十三省、二藩部となす。支那本部
 は最も豊饒なる部分にして、十八省、直隸、山東、山西、河南、陝西、甘肅、江
 蘇、安徽、浙江、江西、湖北、湖南、四川、貴州、福建、廣東、廣西、雲南に分ち、滿州
 は清朝の故地にして、東三省、盛京、吉林、黑龍江に分ち、伊犁は新疆省
 となし、青海は青海省となし、蒙古と西藏とは藩部と稱して、他の直

轄省と政令を異にす。

朝鮮は、滿州の南端より日本海に斗出せる半嶋國にして、山川の
 規模皆狭小なり。全國を分つて八道とす、京畿、忠清、全羅、慶尙、咸鏡、
 平安、江原、黃海の八道是なり。

古來此地方に興廢せし諸國民は、皆亞細亞人種に屬すと雖、歴史
 上之を小別して、漢人種、苗人種、圖伯特種、都爾格種、蒙古種、通古斯種
 の六種族となす。漢人種は、支那中國の人民にして、東洋文明の基
 礎は實に此種族の置きし所なり。苗人種は、漢人種に先つて江河
 の流域を占有し、後ち漢人種に逐はれて、雲南、貴州の地方に退きし
 人民にして、古史に三苗、荆蠻等の稱ある者是なり。

圖伯特種は、西藏の住民にして、漢代には、西南夷と呼べり。都爾
 格種は、嘗て蒙古地方に繁榮せし種族にして、薰鬻、匈奴、柔然、突厥等

はその最著名なる者なり。蒙古種は初め東胡と稱し、漢唐の際には鮮卑及び契丹を出し、宋末には元朝を立て、支那を一統せし人種なり。通古斯種は滿州以東の住民にして、其の最盛なるを滿州人とす、故に通古斯種は亦滿州人種と稱す。韓種は朝鮮半島の住民にして、嘗て三韓を興し、者是なり。

印度洋の水域

第三節 印度洋の水域は喜馬拉耶山脈以南の地にして、前印度に於ては山川東西に傾き、其他に於ては南北に走るを常とす。現時は安南、暹羅、英領印度、伯爾日斯坦、阿富汗斯坦等の諸國を含むと雖、歴史上最注意すべきは英領印度の地理なりとす。

英領印度は北に喜馬拉耶山脈あり、南にデカン高原あり、中間の平野は即ち印度、ガンガ、兩河の流域にして、其の豊饒世界に名あり。英人悉く其豊土を修めて、十二州（ビルマ、アッサム、ベンゴ

ル、西北諸州、オウド、バンヂヤブ、中央諸州、アヂミル、メルワラ、クールグ、マドラス、ボムベイ）に分ち、其の他は藩部（カシミル、ラヂプタナ、等）となして、間接に之を統御す。

此地方の住民は、歐弗人種及亞細亞人種の外、尙ほ馬來種、澳斯德羅利種等あり。歐弗人種は前印度以西に住して、アリア人と稱す。即ち有名なる梵語人種にして、印度の歴史は此種族の専有なりといふも不可なきなり。

亞細亞人種は、兩印度に散布して、馬來人と混じり、前印度に在つては、コール人と稱し、後印度に於ては印度支那人と稱す。馬來種は、馬來半島に住して、殆ど歴史以外の人民なりと雖、澳斯德羅利種は、ドラビド人と稱して、夙に前印度に住し、アリア人に對抗して、印度の古史に大影響を及ぼせり。

アラル海
の水域

第四節 アラル海の水域は、即ち土耳其斯坦の地なり、東は支那の西部より起りて、西は裏海に及び、北はキルギス、荒原に起りて、南はヒンツークーシ山脈に達す。シル、アム、イリイの三川は實にその富源なり。此流域の果して黃白二人種の發育地たりしや、否やは、今より知る可らずと雖、秦漢以後此の地方に興廢せし諸國民は、皆東洋史と密接なる關係を有するを以て、讀史者は決して之を輕視す可らざるなり。

此地方は、亞細亞人種と歐弗人種との分争點にして、古來アリ、都爾格、シエム、蒙古等の諸種族が、互に境土を廣めんとして、東西より相争抗せし處なり、但し今は都爾格、イラン、ガルチの三種族之に住すと雖、疆土の主權は、重に露、清二國に歸し、土荒れ、市廢れて、往古の繁榮全く地を拂へり。

波斯灣の
水域

第五節 波斯灣水域の地は、アルメニアを中心として、東は波斯に至り、西はシリア及び小亞細亞に及ぶ、南には亞刺比亞の大沙漠あり、北にはエルフルズ山脈、高加索山脈等ありて、不毛磽确の地少からずといへども、其他は皆多少の天惠を被りて、海陸共に國民の發達に便なり。殊にチグリス、ユーフラテス二川の沿岸地は、共に豐饒なる沖積層にして、夙にカルデア、アッシリア、バビロニア等の興亡せし所なり。又シリア及小亞細亞は、頗る港灣に富めるを以て、希臘羅馬の文化は、興るに従て、皆此地に移植せられたり。此地今は過半都爾格人の手に歸して、住民も都爾格種多しと雖、上古は重にシム種族の領有にして、其の歴史は全く西洋史に屬すべき者なり、但し波斯に於ては、アリア人最榮え、其の歴史も亦印度及中亞細亞の歴史と分離す可らざる者少からざるなり。

第二章 三皇、五帝、及夏、殷

三皇

第一節 唐虞以前の歴史は、亡びて詳にし難しと雖、確實なる傳説によりて之を推せば、今より大凡五千年前に於て、已に漢人種は、黄河の沿岸を東下し、苗人種を逐ふて、河南、山東、二省の地に及びしものゝ如し。

以下第二
地圖参照

當時は未だ一統の君主なく、唯數多の酋長ありて、互に各地に割據せしに過ぎざりしが、其間に興廢して、最も有力なりしを、燧人、伏羲、神農の三氏とし、女媧氏、共工氏、等また之に次げり。後世此時代を名けて、三皇の代と稱す。

五帝

第二節 五帝の代は、黃帝を以て始まり、帝舜に至りて終る、其間蓋し四百數十年なり。黃帝は軒轅氏にして、有熊國(河南省)の君の

子なり。始めて干戈を以て諸部落を統一し、其の領有、東は海に至り、西は空桐(甘肅省)に及び、南は楊子江に接し、北は釜山(直隸省)に達せりといふ。

黃帝の後、顓頊、高陽氏及帝嚳、高辛氏の二氏、相繼ぎて帝位を踐めりと雖、其の事蹟は殆ど考ふるに由なし。堯、舜二帝の代に至りて、始めて有史時期に達せり。

堯舜二帝
の事蹟

第三節 帝堯は陶唐氏にして、帝舜は有虞氏なり。故に此二代を合せて、唐虞の代と稱す。儒者の仰きて無上の聖世となせるもの、即是なり。堯は帝嚳の子にして、平陽(山西省)に都し、羲和二氏をして曆法を定めしめ、鯀をして洪水を治めしめ、舜を畎畝の中に擧げて、遂に之に位を讓れり。

舜は瞽瞍の子にして、夙に賢名あり、堯の禪を受けて、蒲阪(山西省)

に都し、先づ禹をして鯀に代つて、九州の水土を治めしめ、次に四凶（共工、驩兜、鯀、三苗）を罪して、威徳を耀かし、且つ巡狩、述職の制を立てて、國家の主權を堅くせり。

夏

第四節 禹水土を治めて大功あり、舜の禪りを受けて天位に上り、安邑（山西省）に都して、夏后氏といへり。夏は禹が封國の名なり。禹は能く舜の政策を守りて、境土を廣め、益主權を強めて、遂に王位世襲の基を作りたりしが、其の崩ぜし後は、漸く不廷の諸侯を生じ、相の時に至りては、有窮國の君羿、及び其の臣寒泥の亂起れり。當時は幸にして、子少康出て、中興の業を全ふせしと雖、其後國威益衰へて、貪虐なる桀の立つに至り、終に商王成湯の爲に滅されたり。時に西紀前十八世紀なり。

殷

第五節 殷の曩祖を契といふ。契嘗て商（陝西省）に封せられし

を以て、始めは國號を商といひ、後殷（河南省）に都して、殷と改めたり。契より十餘世を経て成湯に至り、伊尹を聘して相となし、先づ四夷を征して國土を廣め、遂に夏桀を南巢（安徽省）に放ちて、六百餘年の殷朝を臺（河南省）に開けり。湯王の後は、王威幾度か衰へて、諸侯離畔せしことありと雖、大甲、大戊、祖元、般、庚、武丁、祖甲等の明君時々起りて、之を中興せしを以て、能く二十八世の久しきに傳ふることを得たり。然れども、紂王立つて、更に國政を顧みず、賦税を厚くし、刑辟を重くし、淫虐日に甚しくして、三仁（微子、箕子、比干）ありと雖、如何ともすると能はざりしかば、遂に周の武王の爲に滅されたり。時に西紀前千二百二十三年なり。

第三章 周室の興亡

周の基業

以下第二
地圖参照

武王

第一節 周は姬姓にして、其の曩祖を棄と稱す。帝舜に仕へて部(陝西省)に封せられ、號して后稷といへり。古公且父に至り、獯鬻を避けて、岐山の下に邑し、國號を立て、周と稱し、始めて夷狄の俗を脱して、城郭室屋を營めり。昌に至り、殷の紂王の命を受けて、西伯となりしかば、諸侯殷に畔きて、昌に歸する者益多く、天下を三分して、既に其の二を保てりといふ。

第二節 西伯没して、子發立つ、之を周の武王と稱す。武王は大公望を謀主とし、諸侯を率ひて、紂を牧野(河南省)の一戦に破り、鎬京に都して、天下に君臨し、古公を追尊して大王となし、西伯を文王となし、前代(神農、黃帝、帝堯、帝舜、夏殷)の後を興し、宗族功臣を各地に封

成康の治

周室の東遷

し、公、侯、伯、子、男の五爵を設けて、公、侯には百里、伯には七十里、子、男には五十里の地を與へ、五十里以下の國は附庸と稱して、大國に附屬せしめたり。周の諸侯は、同姓の者五十五、功臣數百に達せりといふ。

第三節 武王崩して、成王立ち、歳尙ほ幼なりしかば、七年の間は周公之が攝政となり、先づ管蔡の亂を平げて、王室の藩屏を堅ふし、次に禮樂制度を定めて、典禮を後世に垂れたり。邑にして成王長ぜしかば、周公は政を歸して、召公と共に王室を輔翼し、康王の世を終るまで、周室極盛の治を致せり。後世之を成康の治と稱す。

第四節 昭王の時より周室漸く衰へ、昭王は楚人に弑せられ、厲王は國人に逐はれ、四夷皆畔きて、京邑危きに至れり。宣王の時、獯、狄、荆蠻、淮夷、涂戎等を征して、一時中興の業を建てしと雖、申公、犬戎と力を合せて、幽王を弑せしより、平王は戎狄の勢當り難きを察し

春秋戦國の形勢

て、都を洛邑(河南省)にあり後の洛陽是也に遷せり。之を周室の東遷といふ。實に西紀前七百八十年なり。

第五節 是より王室益衰へて、諸侯彌專横を極め、強は弱を呑み、大は小を併せ、周初の諸侯漸く亡びて、春秋の世には、強國存する者僅に十二三、戰國に至りては、更に減して七國となり、遂に秦の爲に統一せられたり。春秋とは、孔子の春秋に記載せる時代の總稱にして、平王の末年に起つて、敬王の末年に終り、以後秦の統一に至る迄を戰國の世と稱す。春秋は、五霸交立の世にして、禮義名分尙ほ地を拂はざりしが、戰國は七雄分争の世にして、全く弱肉強食の修羅場たり。

第六節 王室衰弱して、戎狄中國に侵入するに至り、所謂五霸なる者起つて、交、天下の牛耳を執れり。五霸とは、齊の桓公、宋の襄公、

五霸の交立

以下第三地圖を参照

晋の文公、秦の繆公、楚の莊王の五人にして、其最も盛なるを齊の桓公とす。桓公は管仲を用ひて國を富まし、始めて諸侯を鄆(山東省)に會して、尊王攘夷を唱へ、北は冀州の戎狄を攘ひ、南は楚の國に朝貢せざるを責めたり。桓公に繼ぎて起りし者を、宋の襄公とす。襄公は、桓公の遺托を受けて、齊の孝公を擁立し、隨て一時諸侯の盟主たりしと雖、楚人と戰つて大敗し、尋で傷を負ふて病没するや、晋の文公起つて、周の襄王の爲に北狄を攘ひ、楚兵を城濮(山東省)に破りて、諸侯を踐土(河南省)に會せり。此時秦の繆公は、百里奚及び蹇叔を用ひて、内政を修め、由余を用ひて戎を征し、國を益すこと十二地を開くこと千里、遂に西戎に覇として、晋と對峙せり。繆公の後八年にして、楚の莊王起れり。莊王は、周の定王元年に陸渾の戎を討ちて洛水に至り、兵を周境に觀

し、ことあり。其後莊王の威名は皆に江南に振へるのみならず、陳、鄭、宋の三國を伐ち、又晋と鄭(河南省)に戦つて大に之を破れり。此他、五霸の前には鄭の莊公あり、五霸の後には吳の闔閭、越の勾踐等ありて、皆威を一世に振へり。

第七節 其後戰國の世に至りては、皆に弱小なる諸侯の、強大なる諸侯に併吞せられしのみならず、強國と雖、倍臣の爲に、篡奪せられし者往々是ありしかば、春秋時代の諸侯は、概ね亡滅して、僅に秦、楚、燕の三國を存し、晋は周の威烈王の時、韓、魏、趙の三國に分れ、齊は安王の時、田氏の國となり、顯王の末年よりは、諸國皆僭して王と稱し、互に一方に雄視して、疆土の侵略を事とせり。所謂戰國の七雄是なり。

第八節 是に於て、門地、格式を重ざるの舊風は、全く破れ、士大夫

戰國の七雄

合從連衡

は諸國に歷仕して、偏に身の榮達を圖り、浮浪の徒は、列侯、豪族の門に集りて、禮遇、資與の厚きを貪り、遂に有名なる蘇秦、張儀の如き、從横家を出すに至れり。

此時秦の國勢、獨り日に盛にして、山東の諸侯は、皆將に併吞せられんとせしかば、蘇秦は燕の文公に見へて、趙と從親するの利なるを説き、次に趙に至りて、肅侯に説くに、六國合從して秦に當るの必要を以てし、更に韓、魏、齊、楚の四國に歷遊して、諸王の同意を求め、遂に從約を全ふして、自ら其の長となり、身に六國の相印を帯びて、洛陽を過ぐるや、周の顯王は路を拂つて、之を郊迎せり(西紀前三百三十三年)。然れども、秦は直ちに離間の策を講じ、僅に一年にして六國の從親を破り、兵を出して頻りに山東の諸國を撃てり。

其後ち、張儀は、六國をして、連衡して秦に仕へしめんと欲し、先づ

周の滅亡

魏の相となりて魏王に説き、次に謀を以て楚王を屈し、韓王に説き、齊王を諭し、尋で趙と燕とを誘ふて、遂に連衡を全ふせり。

第九節 此時、周は東西に分れ、赧王は西周に在りて、殆ど寄寓の身なりしが、西紀前二百五十六年に至りて、秦の爲に滅され、後七年にして、東周の惠公も、秦に下り、更に二十八年にして、六國皆秦王政の爲に併せられたり。(我國孝靈天皇七十年に當れり)。

第四章 三代の文化

周制

第一節 周の制度は、後世諸朝の模範となせる所なるを以て、此處に其の大略をいはん。官職には、三公、三孤、六官等あり。三公(大帥、大傅、大保)、三孤(少帥、少傅、少保)は、共に行政官にあらざれども、天地、春夏、秋、冬の六官は、各其屬六十官を率ひて、萬政を執行せり。天官

の長を冢宰といひ、地官の長を太司徒といひ、春官の長を太宗伯といひ、夏官の長を大司馬といひ、秋官の長を大司寇といひ、冬官の長を大司空といへり。

兵制は、兵士及び牛馬、兵車等を人民より徵發して、軍隊を編成し、一軍を一万二千五百人とし、之を師、族、卒、兩、伍に分つて、將帥、長、司馬等を其の長となし、天子は六軍、大國は三軍、中國は二軍、小國は一軍を置くを常とせり。

田制は、夏は貢法を用ひ、殷は助法を用ひたりしが、周は徹法といひて、此二法を混用せり。

刑法には、上代より墨、劓、剕、宮、大辟の五刑ありしが、周は始め之に加ふるに、流、朴、徒、贖等の諸刑を以てし、末世には、三族、誅夷、車裂、體解等の酷刑を設くるに至れり。

周の學制は、又頗る完備せる者なり。大學は、辟雍、或は成均といひて、専ら王、后の世子、卿大夫、元士の適子、及國內俊秀の士等に禮、樂、詩、書を教ゆる所とし、小學は、州に序あり、黨に庠あり、閭に塾ありて、普通人民の子弟は之に入りて、洒掃應對の節を學べり。

學術

第二節

伏羲は、八卦を畫き、黃帝は蒼頡をして文字を作らしめ、夏、殷、周の三代は、皆大小の學を設けて、人民の教育を圖りしかば、支那の學術は上世に於て已に長足の進歩をなせり。三墳、五典は今亡びて知るに由なしと雖、尙書は現存して唐、虞、三代の文運を察するを得べし。殊に周の中世以降は、言論自由の世なりしかば、學術は非常の隆盛を極め、學者の輩出せしこと、擧げて數ふ可らず。

今其の最も著名なる者をいはんに、儒家には、孔子、孟子、荀子あり、道家には、老子、列子、莊子あり、墨家は、墨翟を祖とし、楊家は、楊朱を



孔子

祖とし、韓非子は、法家と稱へられ、公孫龍は、名家と稱へられ、孫子、吳子は兵學に長じ、鬼谷子は縦横の術を能くし、屈原、慎到等は、文辭を巧にせり。

孔子及び老子

第三節 孔子名は丘字は仲尼といへり、西紀前五百五十一年を以て、魯の國に生れ、諸國に周遊して、仁道を説けり。其説當時に納れられざりしと雖、尙ほ弟子三千人あり。後世遂に諸學を排して、東洋諸國の文權を一手に集め、萬乘の君主をして、其廟前に拜跪せしむるに至れり、亦盛なりといふべし。

老子は、楚の人にして、姓は李、名は耳といへり。學風全然孔子と異にして、無爲自然を以て其の基礎となせり。著はす所、老子二篇あり、後世の道教は之に附會して起りし者なり。

第四節 黃帝の時、伶倫といへる者、十二律の箏を造りしより、音

音樂

樂は漸々發達して周に至りしが、周は殊に之を重じて、治國の要具となせり。黃帝の樂を雲門といひ、禹の樂を大韶といひ、舜の樂を大夏といひ、湯の樂を大濩といひ、武王の樂を大武といひて、祭祀毎に之を奏せり。

第五節 葬祭の禮も、周に至て大に備はれり。葬禮には、殯殮の法あり、棺槨、喪服の制あり、皆門地親疎によりて、厚薄を異にせり。又宗廟の祀と、天地山川の祭とは、當時最も重ぜし處にして、郊祀、社稷等は、天子の一要務なりき。

第五章 漢人種と四夷との争抗

第一節 漢人種の始めて國を黄河の沿岸に立つるや、南蠻は、其南にありて、支那本部の大半を保ち、東夷は、淮水の下流より、山東省

葬祭

三皇五帝時代の形勢

以下第二地圖参照

の東部に據り、北狄は、山西省に入り、西戎は、渭水の兩岸に迫れり。是れ即ち三皇時代の形勢なり。降て五帝の世に至り、黃帝は、黄河を渡りて、北方を經營し、葷粥(獯鬻)を逐て、遙に直隸省の北に至りしことありしが、其後の諸帝は、専ら苗人種(南蠻)の征服に従事せり。舜、禹、二帝は、殊に之が爲に力を盡し、舜は三苗を征して、檜梧の野(廣東省)に崩し、禹も亦南巡して、會稽山(浙江省)に至りて崩せり。蓋し當時、苗人種の據りし處は、楊子江の流域にして、支那全土中、最も豊饒の地なりしかば、漢人種は、之を占領せんとして南侵せしなり。

第二節 是に於て南方の諸蠻は、漢人種の勢威に服し、久しく種族の争ひなかりしが、周に至りて、戎狄頻りに中國に侵入せり。周は西戎の地に起りしを以て、其の微弱なりし時は、大に戎狄の難を被りしと雖、國力の上るに隨て、漸く之を攘ひ、遂に秦隴の野に據て、

周初の交渉

天下を治むることを得たり。

周室の盛なるに當つては、僅に東夷の叛ありしに過ぎざりしが、其の衰ふるに及びては、四夷皆離畔し、昭王は楚人の爲に弑せられ、穆王は犬戎を征して、却て荒服の國を失へり。宣王に至り、召穆公をして淮夷を平けしめ、方叔をして荆蠻(苗人種)を伐たしめ、尹吉甫をして玁狁(秦漢時代の匈奴にして、即ち都爾格種なり)を征せしめ、一時周室を中興せしと雖、其子幽王は、犬戎に攻殺せられ、平王は爲に岐周の地を捨て、都を洛陽に遷せり。

五霸の攘夷

第三節 此時、西戎、北狄は、雍州、冀州を侵して、豫州に及び、豫州の東には、徐戎、淮夷あり、燕の北には、東胡(蒙古種)山戎(都爾格種)あり、楚は南蠻を率ひ、秦は西戎を併せて、互に中國に當らんとせしかば、齊の桓公は、尊王攘夷を唱へて、中國の諸侯を糾合し、北は戎狄を伐つ

戎狄の敗退

て、燕衛を救ひ、南は楚を破つて、南蠻を抑へ、其の後、宋襄、晋文の二公、相繼ぎて覇を中國に稱し、或は戎狄を驅逐し、或は秦楚と戦ひ、一には王室の尊嚴を保ち、一には中國の威力を示せり。

第四節 既にして、秦は雍州の狄を攘つて、其の北に長城を築き、楚は淮夷、徐戎を併せ、韓、魏は豫州の戎を下し、趙の武靈王は、林胡、樓煩を破つて、陰山以南の地を清め、燕の秦開は、東胡を退けて、遼東に及び、燕、趙共に、秦に倣つて、長城を其の北邊に築きしかば、外夷の入寇は一時全く中絶するに至れり。

アリア人種の侵入

第六章 印度の上世

第一節 印度の古史は、アリア人種の侵入を以て始むるを常とす。アリア人に先つて、ドラビドといへる、オーストロロイド種あり、

第四地圖
参照

石器時代の人民を驅逐して、盛に印度河及びガンガ河の水域に繁殖せしが、西紀前大凡二千年頃に當りて、アリア人種は、裏海の東南より來りて、バンドヤブ地方に侵入し、先づ印度河と、ヂヤムナ河との間を占領して、根據地となし、ドラビド人と戦つて、或は之を征服し、或は之を驅逐し、西紀前千年頃に至りて、始めてガンガ河に達することを得たり。

第二節 此時代の史料として今日に存せる者は、僅に韋陀といへる古教文に過ぎずと雖、是に由て當時を推考すれば、アリア人はドラビド人を逐つて、ガンガ河上に至りてより、社會上及び宗教上に大なる變化を來し、者の如し、即ち社會は、四大部族に分れ、宗教は婆羅門教となれり。

第三節 四大部族とは、婆羅門、刹諦利、吠舍、首陀羅の四族是なり。

社會上及び宗教上の變化

四大部族

婆羅門教

婆羅門は、僧族にして最も勢力あり、教法、學術を以て其の專業となせり。之に次ぎて勢力ありしは、刹諦利にして、殆ど文武の政權を專有せり。蓋し刹諦利は嘗て社會の最高位を占めし部族なりしが、婆羅門教の興るに及んで、遂に僧族の爲に抑せられしなり。刹諦利に次げるは、吠舍にして、其生業は商工の二業を常となせり。最下級の首陀羅は、恐らくアリア人に征服せられし、ドラビド人にして、耕作、牧畜、雇工等の卑賤なる事業を營めり。

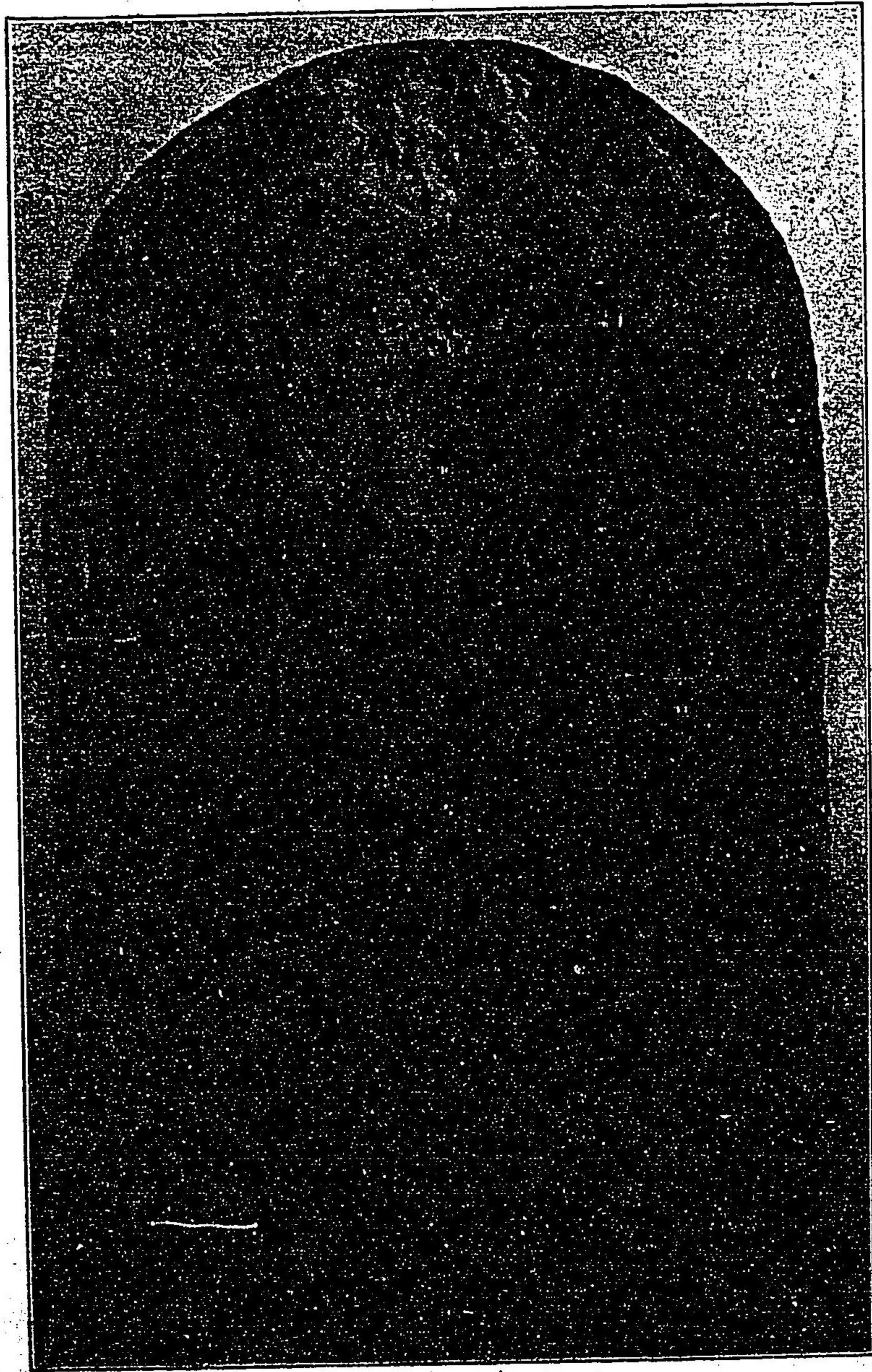
第四節 婆羅門教は凡神教にして、神と萬有とを同一物と視做し、萬物は皆神より出で、復た神に歸する者なることを説けり。是を以て、生物に關しては、靈魂輪廻の説を唱へ、凡そ生物の此世に生るゝは、過去の罪惡を滅さんが爲なれば、早く之を消滅して、未來には本體に歸すべしと稱し、人をして専ら懺悔、苦行によりて、靈魂

釋迦牟尼
の誕生

の解脱を求めしめたり。

第五節 婆羅門教は、其の説く所、美は則ち美なりと雖、年代の重なるに従つて、漸く貴族的の宗教となり、貴族的の宗教となると共に、益婆羅門族の勢力を増加し、僧侶は教法二權を專有して、自己の權力を養ひ、下級の人々は、段階彌懸絶して、更に宗教の恵みを受くると能はざるに至りしかば、有名なる釋迦牟尼は刹諦利族より起りて、之が改革を圖り、遂に佛教を開きて、四民共有の宗教となせり。

釋迦は族名にして、實名を薩波悉達と稱す。牟尼とは覺の義なり。西紀前五世紀の中頃を以て、喜馬拉耶山下の迦毘羅伐罕都今のオウド州中に在りに生る。父は迦毘羅城主にして、名を淨飯といへり。釋迦は其の長子にして、歳既に三十に近く、王冠は目前に在り、妻子は膝下に侍り、世上の榮華求めて得べからざる者な



小川一真寫真彫銅版及印刷

像佛の代上度印

りしと雖、人生の無常を思ふ毎に、煩悶遣らん方なく、之が解脱を圖らんとして、一夜逃れて宮殿を出で、全く浮世の關係を斷ちて山林に籠り、難行、苦學凡六年にして、漸く解脱の法を悟り、山を下りて布教に従事すること、前後四十餘年、専ら婆羅門教の弊を矯めて、一切衆生の濟度ををはかれり。

第六節 佛教の教理は、婆羅門教の教理と全然異なるにあらず。其の害毒を流せる部分を除きて、他は悉く之を採用し、空理に走らずして、實行を旨とせしかば、幾もなくして諸國に數多の佛徒を生じ、婆羅門教徒の如きも、皆靡然として之に歸依するに至れり。然れども佛教の大に勃興して、印度以外に流傳せしは、實に佛滅後一世紀以後の事なり。

當時、印度は數多の小國に分裂し、互に一方に割據して、相抗爭せ

しが、中天竺の摩竭陀國は、其の最大なる者にして、那伽朝の王世々之を統治せり。然るに西紀前三百十五年に至りて、闍度羅瞿布多なる者首陀羅族より起りて、其の位を奪ひ、毛利耶朝を立て、古來の族制を破り、孫阿輸迦王に至りて、深く佛教に歸依し、堂塔を建て、聖諭を下し、西紀前二百五十年には、諸大法師を集めて、今のバトナに佛經の結集を行ひ、又教法大臣の官を設けて、布教に力を盡し、前印度一帶の地はいふに及ばず、西は大夏（バクトリア）に至り、東は馬來半島に至り、南は海を越へて盛に錫蘭嶋に共通せしかば、佛教は忽ち稀有の隆盛を極めたり。

但し當時の佛教は、所謂小乗教にして、前印度及中亞細亞に於ては、後ち婆羅門教と回々教との爲に、蹂躪せられしと雖、錫蘭嶋に於ては、完全なる發達を遂げ、西紀四百五十年には、緬甸に傳へ、同六百

外人の侵

三十八年には暹羅に傳へ、尋で、デワ、ハリ、等に入りて今日に至れり。歐人の南派佛教といへる者即是なり。

第七節 上古印度の外患中、最も先きなるを、波斯王、ダリウス

の侵入とす。ダリウスは、西紀前五百二十一年を以て王位に上り、パピロニアを平げ、アラビヤを降し、西紀前五百十八年には印度に侵入して、印度河の流域を取り、其地に課するに、數多の貢賦を以てせり。西紀前三百二十七年に至りて、印度は復た希臘の歴山大王の侵略を被れり。大王は、マケドニア王、ヒリッポの子なりしが、父王の弑殺せらるゝに及んで、之に代つて王位に即き、先づ希臘の諸國を定めて後ち、東方諸國遠征の大軍を興し、自ら之に將として、シリヤ、埃及、波斯等を征服し、遂に其餘威を以て、印度の西北に侵入し、ポールスの兵を破りて、パンヂヤブの地を略し、尙ほ進

で摩竭陀國に討入らんと欲せしが、兵士歸を思ふこと切にして、敢て命を奉ぜざりしかば、止むを得ずして師をハイフシス河より班せり。

後四年を経て大王崩し、(我邦孝安天皇七十年)其將セリウコス、東方の侵地を獲て、シリヤ王國を立て、兵を率ひて再び印度に侵入せしが、闐度羅王善く禦ぎて、入ること能はざりしかば、遂に和を結んで、其女を闐度羅に嫁し、且つメガスセチスを公使として、摩竭陀國に駐在せしめたり。

第二編 秦初より南北朝の終に至る

第一章 秦の興亡

秦の基業

第一節 秦は、嬴姓にして、其の先は顓頊の後なり。非子の時に

至りて、周の孝王の爲に秦邑に封せられ、襄公に至りて、犬戎を拂ひし功によりて、列侯となれり、其の後繆公は、由余、百里奚等を用ひて、西戎に覇を稱へ、孝公は商鞅を用ひて、國を富まし、兵を強めしを以て、始皇帝は、其餘威によりて、能く六國を統一することを得たり(西紀前二百二十一年)。

第二節 始皇帝は、咸陽(陝西省)に都して、天下に君臨し、李斯の議

始皇帝の事蹟

以下第五
地圖参照

を納れて、郡縣の制を立て、民間の兵器を没收し、海内の富豪を帝都に集め、度量衡を一にし、車軌文字を等くし、屢郡縣を巡行して、處々に封禪を行ひ、務めて中央集權の實を擧げんことを圖れり。又帝の對外政略をいへば、北は蒙恬をして兵三十萬に將として、匈奴を陰山の北に撃退して、萬里の長城を完成せしめ、南は百越を征して、今の安南に及び、桂林、南海、象郡の三郡を置きて、五十萬の謫民を之が戍に充てたり。

秦の衰亡

第三節 斯くして、秦の國威は、北は匈奴に振ひ、南は安南の南端に達せしと雖、儒生は新政に驚き、庶民は奔命に勞れ、天下復亂を思ふに至れり。是に於て、始皇は詩書を燒き、儒生を殺して、敢て新政を非議することなからしめしと雖、大役頻りに起りて、人心益秦を離れ、始皇崩して、二世皇帝の世に至るや、陳勝、吳廣は、斬安蕪省に起

抗 漢楚の争

り、項梁、項羽は吳に起り、劉邦は沛(江蘇省)に起り、田儻は齊に起れり。

而して秦將章邯は征賊の命を奉じて、頻りに趙魏の賊を破りしと雖、項羽は之を鉅鹿(直隸省)に降し、尋で劉邦は進て秦に向ひ、饒關を破つて、霸上(陝西省)に到りしかば、秦王子嬰出て、軍門に降れり。時に西紀前二百六年にして、我國孝元天皇の九年なり。

第四節 秦既に亡びしと雖、項羽の勢は益強く、自立して西楚の霸王と稱し、天下を分つて諸將を王とし、劉邦に與ふるに、巴蜀、漢中の三郡を以てし、關中の地は悉く秦の降將に與へて、其の衝路を斷てり。是に於て、劉邦は怨を呑んで漢王となり、蕭何、張良、韓信、陳平等の諸名臣を用ひて、先づ關中の地を略し、尋で兵を出して、項羽と戦ひ、遂に之と垓下(安蕪省)に破りて、全く天下の主權を得たり(西紀

前二百二年

第二章 西漢

策 皇帝の政

第一節 漢王は楚に勝つて、帝位に上り、都を長安に定めて、秦の遺業を継げり、西漢の高帝即是なり。高帝は、諸制多く秦の舊によりて、簡易、無爲を旨とせしが、秦の亡滅に鑑みて、封建の制度を再興せり。但し諸功臣を封ずるには、極めて心を用ひ、或は位次を高め、封戸を減し、或は同族を要地に封じて、之を守らしめ、韓信、彭越、英布、等の如きは、皆反を名として誅除せられたり。

帝は、又匈奴を拂はんとして、冒頓單于の爲に大に白登(山西省)に圍まれしことありしかば、外交の策を一變して、之と和親を結び、或は公主を與へ、或は幣物を贈れり。

呂氏の難

第二節 高帝崩して、惠帝立つに至り、大政は悉く呂太后の手中に歸して、其の一族は要路に當り、劉氏は痛く抑へられて、帝位も亦將に呂氏の有とならんとせしが、高帝の各地に分封せし諸侯王は、彌強大にして、敢て呂氏に屈せず、太后の崩すると共に、兵を擧げて、諸呂の誅滅を謀れり。時に陳平、周勃の二人朝に在りて、劉氏を助け、悉く呂氏を族滅して、其の難を絶てり。

七國の反

第三節 呂氏の難は、斯くして平ぎしと雖、之に次ぎて起りしは、諸侯の跋扈是なり。文帝は、已に其の他日國家の憂患たるべきを察して、勉めて之を弱むるの策を取りたりしが、景帝に至りて、晁錯の説を納れ、罪に托して、楚、趙、膠西、吳の四國を削りしかば、吳王先づ兵を擧げて反し、膠西、膠東、淄川、濟南、楚、趙の諸王も、之に應じて反旗を翻せり。是に於て、帝は周亞父を大尉となし、三十六將軍を率ひ

武帝の雄圖

て、之を平定せしめ、以後は痛く諸侯王を抑制せり。

第四節 孝武皇帝は、西紀前百四十年を以て帝位に上り、同八十七年を以て崩せり。實に漢代の英主にして、其の雄圖は遙に秦の始皇帝を凌駕せり。今其の一斑を擧ぐれば、高帝以後、匈奴は益強くして、時々來て邊境に寇せしを以て、武帝は之を一掃せんと欲し、衛青、霍去病、季廣利等を用ひて、屢匈奴を征し、狼居胥山を越へて、漠北の瀚海に及び、北は鄂爾多斯の地に朔方、五原の二郡を置き、西北は甘肅省の中に敦煌、酒泉、張掖、武威の四郡を置きて、之が守りに充てしかば、單于遠く遁れて、敢て漠南に出る能はざるに至れり。

武帝は又南越の反を平げ、東越の民を移して、悉く南方を定め、西南は夜郎、且蘭、邛都、笮都、冉駹、白馬、滇、等を平けて、皆郡となし、東は楊僕、等を遣はして朝鮮を討滅せしめ、國を分つて、樂郎、臨屯、玄菟、眞番

の四郡となせり

以下第七
地圖を參
照

次に武帝の爲に没す可らざるは、西域諸國と交通を開きしこと
是なり。當時西域には、大小數十國あり、殊に葱嶺以外には、大宛、浩罕、大月氏（アラル）海の東南、大夏（バクトリア）、安息（バルチャ）、身毒、等の大國ありて、羅馬、埃及の文化を傳へ、殖産、通商亦大に各地に行はれたりしが、張騫は武帝の命を奉じて、之よ使せしこと、前後三回、始めは大月氏に結びて、匈奴を討たんとせしも、要領を得ずして歸り、次には西南路を取りて、身毒に至らんとして、路を昆明に閉ぢられ、最後には匈奴北に遁れて、西域の道通せしを以て、西は安息に通し、南は身毒に達し、始めて東西交通の端緒を開けり。

第五節 孝宣皇帝は、武帝の如き雄圖を懷きしにあらずと雖、賢相、良吏并起つて、之を扶け、時運に乗して、能く兵を用ひしかば、内治

宣帝の威
徳

の盛なるは、前後比なく、匈奴、西域に、向ても、亦國威を輝すことを得たり。

此頃匈奴は、漢を恐れて、敢て邊境を侵さざりしが、其の漢と和親せる烏孫(新疆省にあり)を伐つに至り、帝は五將軍を出して、之を救つて大に匈奴の軍を破らしめたり。時に匈奴は、北は丁零に侵され、東は烏桓に迫られ、烏孫西方より襲ひ、漢南方にありて之を牽制せしかば、國力日に衰へて、内政亦大に亂れ、二單于の並び立つに至りて、呼韓邪單于は藩臣と稱して來朝し、郅支單于も亦使を遣はして入朝したり。

又帝の世に當りて、張奉世は莎車、葉爾羌を平げ、鄭吉は車師(甘肅省)を討ち、趙充國は先零(青海省)を鎮め、始めて都護府を烏壘(庫車地方)に置きて、西域三十六國を管せしめたり。

王莽の篡奪

第六節 其後漢の歴史は、殆ど宦官と外戚との軋轢史にして、天下は遂に外戚王氏の手に落ちたり。王莽は成帝の世に身を起して、大司馬となり、哀帝の時一たび退職せしと雖、平帝の時復起つて、事を用ひ、既にして帝を弑して、孺子嬰を立て、尋て自ら帝位に上りて、國號を新と稱せり、然れども、内は新政頻りに出て、民其の煩に堪へず、外は好を匈奴に失ひて、國威日に衰へたりしかば、海内大に亂れて、群雄并び起り、西紀二十三年(我國垂仁天皇の五十二年)に至りて、東漢の光武皇帝の爲に滅されたり。

第二章 東漢

第一節 光武皇帝は、劉秀と稱す、漢の景帝六世の孫なり。西紀

二十二年を以て、兄續と共に兵を舂陵(湖北省)に起し、新兵を昆陽(河

光武皇帝

南省に破りて、大に威名を收め、西紀二十五年を以て、帝位に上り、洛陽に都して、海内を平定せり。

此時赤眉の軍は長安に入り、公孫述は蜀(四川省)に據り、隴西(甘肅省)には隗囂あり、河西(甘肅省)には竇融ありて、皆光武の正朔を奉ぜざりしが、帝は鄧禹、馮異、馬援、吳漢、岑彭等の諸將を用ひ、建武十二年に至りて悉く之を平げたり。

第二節 光武の時、匈奴に内亂ありて、國南北に分れ、南單于先づ來て、漢に降りしかば、光武は之に西河(山西省)、美稷(鄂爾多斯)の地を與へ、尋いで北單于も使を遣はして、和親を乞ひしかば、漢と匈奴との間は、一時全く平和なりしが、明帝の時に至りて、祭彤、耿秉、竇固等をして、南匈奴及烏桓の兵を率ひて、北匈奴の右臂を伐つて、伊吾盧の地を取らしめたり。是に於て、北匈奴は大に衰へ、後ち竇憲の再

明章二帝の外交

び之を征するに及んでは、殆ど亡滅に近づけり。

當時西域には、漢の威令久しく行はれずして、諸國半は匈奴に服屬せしが、假司馬班超、竇固の命を受けて、鄯善に使し、匈奴の使を斬て、其王を威嚇し、勢に乗して于闐(和闐)、疎勒(喀什喀爾)等を降志しかば、西域再び漢に服して、漢は都護及び戊己校尉を車師に置けり。

其後ち章帝の時に至り、西域復叛きて、北匈奴來り攻めしかば、帝は、都護及び二校尉を罷めたりしが、班超、疎勒に在つて、獨り之が平定の任に當り、莎車(葉爾羌)、龜茲(庫車)、焉耆(喀喇沙爾)等を降して、西域五十餘國の都護となり、西域に留ること前後三十一年、嘗て甘英を使として、大秦國(羅馬)に通せんことを圖れり。

第三節 宦官は、安帝の時より漸く任用せられ、桓帝、靈帝の時に至りて、所謂黨人と衝突せり。黨人とは、當時氣節を重んずるの士

宦官の跋扈

力を合せて、宦官の専横を抑へんとせしより、宦官の爲に名けられし名稱にして、其の重なる者には、竇武、陳蕃、劉淑、李膺、杜密、等あり。大學の諸生亦之に加はりて、朝政を誹議せしかば、宦官は桓帝に上書して、黨人二百餘人を捕へて、悉く獄に下せり。

後ち靈帝の時に至り、陳蕃、竇武と謀りて、宦者曹節、王甫、等を殺さんとし、却て宦官に先んぜられて、黨人の死徒廢禁せられし者、六七百人に及べり。而して宦官の勢威は、尙依然として衰へざりしが、漢末に至りて、袁紹の爲めに誅滅せられたり。

第四節 漢室の威令行はれざるに至り、英將、猛士四方に起りて、互に雌雄を争ひしが、其の重なる者を、袁紹、董卓、曹操、劉備、孫權、等とす。袁紹は宦官誅滅の指導者なりしが、董卓の來りて、獻帝を立てんとするに至り、議合はずして出奔し、關東の諸將を率ひて、卓に當

漢末の騷亂

れり。既にして卓は其臣呂布の爲に弑せられ、曹操之に代つて、政權を握りしかば、紹は冀州に據りて、之と戦へり。

曹操は沛の人にして、字を孟徳と稱す、靈帝の時黃巾の亂を平げて、始めて名を知られ、後ち獻帝を許(河南省)に奉して、司空となるに至り、天下の政權は悉く其の一身に集れり。是に於て、曹操は呂布、袁術、袁紹、等を滅ぼして、自ら丞相となり、勢威一世に振ひたりしが、劉備は孫權と力を合せて、之を赤壁(湖北省)に破り、始めて三國鼎立の基を作れり。

劉備は涿郡の人にして、字を玄徳と稱す、漢の皇帝の後なるを以て、關羽、張飛、等と共に、漢室の恢復を謀り、初は曹操に歸せしが、後去て之に抗し、諸葛亮を用ひて、蜀に據れり。

孫權は孫堅の子にして、孫策の弟なり。堅嘗て荊州を攻めて、陣

中に没し、策は其の餘兵を收めて、周瑜と共に江東を定めたりしが、策の人に殺さるゝに至て、權之に代れり。

第四章 三國の興亡

第一節 西紀二百二十年、魏王曹丕、父操に代つて丞相となり、尋で獻帝に迫つて、位を譲らしめ、江北十一州を領して、魏の高祖文帝と稱せり。劉備は其の翌年、巴蜀の地に據つて、蜀の昭烈皇帝と稱せり。後ち八年を経て、孫權は江南に據つて、吳の太祖大帝と稱せり。所謂三國の鼎立是なり。

第二節 蜀の昭烈皇帝は、嘗て關羽の吳に殺されしを怒りて、之に報ひんと欲し、即位の二年、大兵を發して、親ら吳に侵入せしが、攻守六ヶ月に至りて、遂に吳將陸遜の爲に破られ、纔に遁れて、白帝城

三國の鼎立

以下第六地圖参照

三國の交戦

(四川省)に入ることを得たり。既にして、吳の太祖使を遣はして、好を蜀に通せしかば、帝も之に應じて、使を遣はし、共に連合して、専ら魏に當れり。

蜀吳の交戦に次ぎて、魏吳の平和破れ、魏の文帝は先づ諸將を遣はして、南伐せしめたりしが、更に志を得ること能はず、尋て大軍を發して、親征すること、前後二回に及びしと雖、共に江水の漲溢に會ふて、空しく師を班せり。

此時、蜀の昭烈皇帝は既に崩して、後皇帝立ち、諸葛亮先帝の遺詔を奉じて、之を輔け、先づ南夷を征服して、後ち北伐の師を出し、祁山(甘肅省)を攻めて、敵將張郃に破られ、陳倉(陝西省)を圍みて、糧食盡き、更に祁山を圍みて、復糧食乏しかりしかば、亮は乃ち國に還りて、勸農、講武に力を盡せり。

三年を経て、軍備稍整ふに至り、亮は吳の太祖と約して、同時に魏を侵せり。是に於て、魏の明帝は自ら出で、吳の師を退け、司馬懿をして、亮を禦がしめたり。亮は懿と五丈原に相持すること、百餘日に亘りたりしが、遂に病を發して、陣中に没し、屬將楊儀、姜維、等兵を收めて蜀に還れり。

第三節 其後魏に於ては、司馬氏勢を得て、天子の廢立も其の意に出で、懿の子昭の世に至りては、相國となりて、晋公に封せられたり。時に蜀の姜維兵を出して、魏を攻めしかば、昭は鄧朐、鍾會、等をして蜀を伐たしめ、後皇帝を降して、蜀を滅せり（西紀二百六十三年）。是に於て、司馬昭の勢威益振ひ、九錫を加へて晋王となり、其子炎は元帝の禪を受けて、帝位に上れり、是を西晋の世祖武皇帝といふ、實に西紀二百六十五年なり。

三國の滅亡

此時吳も國勢既に衰へしといへども、尙ほ江南の故地を保ちて、帝號を稱し、屢晋の邊境に侵入せしが、西紀二百八十年に至り、晋の武帝は杜預、王濬、等をして、之を討滅せしめたり。

第五章 兩晋及五胡の盛衰

八王の亂

第一節 晋の武帝は魏の孤立して、早く亡びたるに鑑み、大に宗族を封して、藩屏となせしが、惠帝の時に至りて、皇后賈氏の事を用ひしより、所謂八王の亂を起せり。八王とは、汝南王亮、楚王瑋、趙王倫、齊王冏、成都王穎、河間王顒、長沙王乂、東海王越の八人にして、互に起て政權を争ひ、骨肉相殘賊すること、前後六年に亘りしかば、晋政大に亂れて、天下を統御すること能はず、五胡塞内に並起つて、帝と稱するに至れり。

胡人の跋
風

第二節 此時劉淵は左國城(山西省)に起り、李雄は成都(四川省)に起り、拓拔廆、慕容祿官の二人も、亦北方に起りて、勢威日に振へり。廆及び祿官は、共に鮮卑(蒙古種)にして、廆は大刺城(盛京省)に據り、祿官は上谷(直隸省)に據り、李雄は氐(圖伯特種)にして、父特の時より蜀に入り、雄に至つて刺史羅尚を逐つて、成都を取り、懷帝の時より帝と稱し、國號を成といへり。

劉淵は南匈奴(都爾格種)の後にして、惠帝の時衆に推されて、大單于となり、國號を立て、漢といひ、尋で帝と稱して、都を平陽(山西省)に移し、子聰、族曜、及び羯人石勒を用ひて、屢西晋に入寇し、淵死して、聰の立つに至り、遂に全く西晋を滅せり。時に西紀三百十六年なり。

第三節 西晋の亡びし翌年、司馬懿の曾孫睿建康(江蘇省)に即位

東晋の沿革

して、江東を領せり、之を東晋の元帝といふ。東晋の初世は、王敦、蘇峻等の叛ありて、國威更に振はざりしが、桓温の出るに至りて、頗るに外征の師を出し、西は漢(李壽)自立して、成を改めて漢といへり。を滅して、蜀を併せ、北は趙、秦、燕を伐つて、中原の恢復を圖れり。是に於て、國力漸く強く、秦主苻堅の、大舉して入寇せし時の如きは、謝石、謝玄の二將ありて、大に之を淝水(安徽省)に破れり。其後、劉裕なる者あり、妖賊孫恩を平げ、桓玄を誅し、南燕を滅ぼし、後秦を降し、功を以て宋公に封せられ、西紀四百二十年に至り、恭帝の禪を受けて、宋の武帝となれり。

第四節 東晋の初め、漢主劉曜、石勒と隙あり、曜は國號を趙と改め、勅は襄國(直隸省)に據り、後趙を開き、尋で趙を併せたりしが、冉閔之を篡して、魏と改め、魏も亦久しからずして、燕の慕容儁の爲に併

江北諸國

せられたり。此他江北には、尙ほ涼代の二強國ありしが、秦の興るに及んで、皆其の併呑する所となれり。

秦は氏酋蒲洪より出づ、洪は嘗て趙に屬せしが、後ち背きて晋に通じ、姓を改めて符といへり。子健は秦天王と稱し、又帝と稱せり。健卒して子生狂暴なりしかば、從兄堅之を弑して自立し、王猛を用ひて、悉く江北を統一し、海内を十分して、其の八を有せり。

是に於て、堅は志を決して、南征を企て、成卒六十餘萬、騎兵二十七萬を率ひて、東晋に侵入せしが、晋將謝石及び謝玄の爲に、大に淝水に破られ、國勢全く傾きて、江北再び亂れ、後燕、後秦、西燕、西秦、後涼、後魏、南燕、北燕、南凉、西凉、北凉、大夏等の諸國、續々として興り、紛紜騷擾殆ど名狀すべからざりしが、後魏の太武帝立て、大夏、北燕、北凉を滅ぼし、吐谷渾を逐ひ、柔然を退くるに至り、北方は全く統一せられて、

天下は南北二朝に分れたり。

第六章 南北二朝の對立

南北二朝の傳紹

第一節 南朝は、淮漢以南を領して、宋、齊、梁、陳の四朝に傳紹せり。北朝は、其の北を有して、始めは後魏に統一せられ、後ち後魏分れて、東魏、西魏となり、東魏は北齊に傳へ、西魏は後周に傳へ、後周、北齊を併せて、隋に讓れり。

後魏と宋神

第二節 宋、魏二國は、地相接して、連年互に侵伐せしが、宋の文帝王玄謨をして、大舉して北侵せしめ、碭碭(山東省)を取りて、滑臺(直隸省)に及ぶに至り、魏の太武帝は、自ら大軍に將として之に向ひ、玄謨を追撃して、大に之を破り、直ちに南下して、瓜步(江蘇省)に到りて還れり。此時魏兵の殺掠は、極めて甚しく、其過りし所は、悉く變じて

以下第六地圖參照

後魏の分裂

赤地となれりといふ。是より南朝は漸く衰へて、北朝は益強く、魏の孝文帝は、屢南侵の師を出して、宋、齊二朝の患をなせり。

第三節 後魏は、太武帝の時、北方を一統し、孝文帝中國の文化を慕ふて、都を平城(山西省)より洛陽に遷し、胡服胡語を禁じて、國勢日に振ひたりしが、其後漸く衰へて、爾朱氏の亂あり、高歡之を平げて、孝武帝を立て、既にして又帝と隙を生じ、帝は歡に逐はれて、關西の大都督宇文泰に依れり。是に於て、泰は帝を長安に奉じて、西魏と稱し、歡は孝靜帝を鄴(河南省)に立て、東魏といへり。

第四節 梁の武帝の時、東魏の將侯景、河南の地を以て梁に降り、帝は之を河南王に封じて、兵を出して東魏を攻めしが、其勝たずして和を講ずるに至り、景は怨みて反旗を擧げ、建康を圍みて、台城を陥れ、遂に和を結んで、大丞相となれり、而して武帝崩するの後は、簡

梁の亂

帝を立て、政權を恣にし、尋で自立して、漢王と稱したりしが、陳霸先王僧辨と力を併せて、之を誅せり。

第五節 此時、東魏は已に北齊となりて、屢江北の諸郡を侵略し、西魏も亦巴蜀を取りて、梁朝は日に衰頽せしかば、後魏の兵は江陵に入寇して、後梁の宣帝を立て、梁の敬帝も尋で位を陳の高祖武皇帝に譲れり。是より先き、北朝に於ては、高歡の子洋、東魏に代つて北齊を興し、南朝に於ては宇文泰の子覺、西魏に代つて北周を開けり。北齊は其後更に振はざりしと雖、北周は宇文泰の後を承けて、國力遙に強く、北齊の衰亂に乗して、遂に之を併せたりしが、隋王楊堅は周の靜帝の禪を受けて、隋の高祖文皇帝となり、即位の七年に後梁を滅ぼし、八年に陳を降して、全く海内を一統せり。時に西紀五百八十八年、我朝崇峻天皇の元年なり。

南北二朝の統一

第七章 秦漢及六朝の文化

儒學

第一節 秦は書を焚き、儒を坑にせしと雖、漢興りて、惠帝挾書の禁を解き、文、景、二帝之に繼ぎて、各儒者を好み、武帝亦之を承けて、大に儒學を尙び、始めて大學を設けて、盛に之を獎勵せしかば、儒學は漸く興りて、黃、老、申、韓の諸學を排し、學者皆力を盡して、専ら經書の意義を講究するに至れり、即ち鄭玄は三禮、周禮、儀禮、禮記、詩、書、易等に註解を施こし、孔安國は尙書の傳を作り、何晏は論語を解き、杜預は左傳に註せり。然れども、漢魏を経て、兩晋の際に至りては、儒學大に衰へて、儒家の擧ぐべき者なく、南北朝の時に至りて、僅に北朝に徐遵明、李鉉等を出せり。

第二節 文學も、漢代より大に發達して、文章、詩賦、共に盛に行は

文學

佛教

れ、小説も既に其端緒を開けり。文人は前漢に賈誼、司馬遷、司馬相如、楊雄、劉向等あり、後漢に班固、張衡、蔡邕等あり、魏に建安の七子、曹植、王粲、劉楨、陳琳、應瑒、阮瑀、徐幹あり、蜀に諸葛亮あり。亮は素と文人ならずと雖、其の出師表は世の傳稱する所なり。兩晋より南北朝に亘りては、所謂六朝の駢儷文大に流行して、詩賦も之と共に益纖巧、華美に赴けり、但し晋には陶淵明、陸機、張華、潘岳等の大家ありて、其文學界は百花爛熳の觀ありしが、南北朝は之に比すれば、頗る遜色を呈せり。南朝には尙ほ沈約、徐陵、庾信の三家ありしと雖、北朝の文士は殆ど數ふるに足る者あらざるなり。

第三節 佛教は、秦の時より既に中國に入り、漢の武帝は匈奴を征して、金人を獲、景憲は月氏の使者に就きて、佛經の口授を受けたりしが、當時は未だ佛教密傳の時代にして、其の中國の國教となり

しは、實に後漢の明帝永平八年(西紀六十五年)以後の事なり。明帝蔡愔、王道の二人を西域に遣はして、佛經を求めしめ、愔等、佛像及沙門二人を得て歸りしより、西域の僧侶は續々として來つて、布教及び經典の翻譯に従事し、魏の文帝國人の僧侶たることを許してよりは、支那人中よりも、道安、慧遠等の如き、高僧、碩徳を出すに至れり。

後秦の時、西域の僧に鳩摩羅什といへる者あり、長安に來りて、姚興の尊信を受け、佛經三百餘卷を譯して、支那佛教史上に一新時期を畫し、長安の僧法顯は、西紀四百年を以て、陸路より天竺に赴き、諸國に歴遊して、佛典を求め、海上より國に歸りて、悉く之を翻譯せり。降つて南北朝の世に至りては、佛教の勢益盛にして、江の南北に流布し、梁の武帝の時には、印度より菩提達磨來りて、始めて禪宗を

傳へたり。爰に當時佛教の諸宗派を歴舉すれば、禪に先つて、毗曇律、成實、三論、涅槃、地論、淨土の七宗あり、禪に後れて、華嚴、天臺、攝論の三派起れり。

第八章 海東諸國

古朝鮮

第五地圖
参照

第一節 朝鮮の古史は、檀君を以て國祖となすと雖、其說荒唐に過ぎて、更に考ふ可らず、箕氏の朝に至りて、始めて史籍に徵するを得べし。箕氏の祖は、殷の太師箕子にして、殷の亡ぶるや、其徒數千人と共に遼東に逃れ、後ち周の武王の封を受けて、古朝鮮を建て、子孫世々平壤に都して、黃海道以北の地を領せり。

箕子より四十一世にして、箕準の世に至り、燕人衛滿なる者亡命して、來て西界の地を求め、遂に準を馬韓に逐つて、衛氏の朝を開け

三韓

り。時に支那は、西漢の初年にして、滿は之と外臣の約を結び、恣に境土を廣めて、國勢日に盛なりしが、孫右渠に至りて、漢の武帝の使者を殺し、漢將楊僕、荀彘、公孫遂等の爲に討滅せられて、國は眞番、盛京省興京府臨屯(江原道)樂浪(黃海道)及び平安道の南部(玄菟)咸鏡道の四郡となり、爾後五十餘年の間は、全く漢の版圖となれり。

第二節 此頃、漢江以南には、既に馬韓、辰韓、辨韓の三國あり。馬韓は最も強大にして、今の全羅道及び忠清、京畿、二道の大部を領し、箕準の子孫世々に君臨して、辰、辨二韓を統御せり。辰韓は馬韓の東に在りて、今の慶尙道の東北部に當り、其民嘗て秦民たりしを以て、一に秦韓といへり。辨韓は、辰韓の南にありて、今の慶尙道の西南部に當れり。

下 貊種の南

第三節 又玄菟の北よりは、貊種侵入し、咸鏡道に入れるを沃沮

起 三國の興

第六及第七地圖參照

といひ、江原道に入れるを濊貊といひ、滿州の南に住めるを扶餘といへり。就中扶餘最も盛大にして、東扶餘、高句麗等皆之より分れて、樂浪に南下せり。

第四節 西漢の末葉に當り、朝鮮の半島には、新羅、高句麗、百濟の三國並び興りて、遂に他の諸邦國を併呑するに至れり。新羅の始祖は朴赫居世と稱す、父は蘇公伐といひて、辰韓の一村長たり。赫居世年十三にして、立つて辰韓六部の君となり、金城(慶尙道慶州)に都して、大に政を修めたりしかば、辨韓は來つて降を請ひ、樂浪、東沃沮等も亦皆其徳を慕ふに至れり。

高句麗の始祖は、東明王朱蒙と稱す、素と葦離王の子にして、北扶餘國に住せしが、國王に容れられずして、南奔して卒本扶餘(平安道成川)に入り、都を沸流水上に定めて、傍近を服し、挹婁人(吉林省の東

境を攘ひ、沸流國の主を降し、荇人國(長白山の東南)北沃沮(烏蘇利江邊)等を滅して、國勢日に強大となれり。

百濟の始祖は、溫祚にして、東扶餘王の子なり、高句麗王朱蒙の、本に來つて國を立つるや、溫祚は之を避けて、慰禮城(忠清道稷山縣)に至り、馬韓の地百里を得て、百濟の國礎を置き、後ち全く馬韓を征服して、都を平壤に遷せり。

第五節 後漢の初めに當り、辨韓の地より、駕洛國の始祖金首露起れり。駕洛始めは強くして、屢新羅を侵ましと雖、素と六部落(駕洛、大伽耶、小伽耶、安羅伽耶、星山伽耶、古寧伽耶)より成れる小國なるを以て、新羅、百濟の間に介在して、外難に當ること能はず、大伽耶先づ日本に投して、其保護を請ひ、諸部亦之に倣つて、悉く皇朝の官家となれり。國史に任那の官家といへる者即是なり。

駕洛國の
興起

高句麗と
支那

第六節 高句麗は、地、支那と接せしを以て、其交渉最も頻繁なり。王莽の漢位を篡奪するや、高句麗の瑠璃王は之に服せずして、新の邊境を侵し、海東の漢地は殆ど全滅せんとしたりしが、後漢の光武出るに及んで、漢は復高句麗を壓して、漢水以北の地を復せり。

後ち幾もなくして、高句麗王宮位に即き、馬韓、濊、貊の兵を率ひて、漢兵と玄菟を争ひしが、百濟の漢軍を助くるに及んで、宮遂に敗死せり。漢末に至り、公孫度遼東に據りて、樂浪の南部に帶方郡を置き、公孫康は高句麗王を擊破して、之を丸都山下(沸流水の西)に逐へり。

三國の時に至り、高句麗の東明王位宮は、始めは吳と斷つて、魏に通し、其將司馬懿を助けて、共に公孫淵を滅したりしが、魏の帶方、樂浪、玄菟等を收回するに及んで、之に畔きて、安平に寇せしかば、魏の

幽州の刺史母丘儉は大兵を率ひ來つて、丸都城を屠れり。位宮は乃ち之を避けて、南沃沮に奔り、既にして歸り來つて、樂浪、帶方を取り、平壤の東黃城を築きて之を國都となせり。

後ち晋の司馬氏政を失ふて、鮮卑漸く強盛なるに至り、慕容氏屢來りて、高句麗を伐ちしかば、高句麗は止むなく臣と稱して、之に貢を納めたり。

第七節 任邦の我日本に來屬せしは、前述の如し。崇神天皇の任那日本府を置きて、之を統治し給ひしより、欽明天皇二十三年、新羅の遂に之を滅するに至る迄は、全く皇朝の版圖たりしなり。新羅は神功皇后の之を征服し給ひしより、世々我邦に朝貢すること

を約し、百濟は之れと共に降を乞ふて、我内官家となり、高句麗も亦尋で我に來朝するに至りしが、就中百濟は最も忠誠を我邦に致せ

三國と日本

り。

蓋し新羅は國小なりと雖、其民從順ならず、高句麗は地遠く國大にして、皇朝の徳化も久しく之を懐くる能はざりし者の如し。齊明天皇の朝に至り、新羅は全く我邦に畔き、唐と力を合せて、高句麗、百濟の二國を滅ぼせり。

第九章 北狄の跋扈

第一節 匈奴は、都爾格種にして、五帝以來、鞏粥、獫狁等の稱あり。蒙古地方に轉住して、世々漢人種を苦めたりしが、秦末に至りて、冒頓單于出で、東は東胡を滅ぼして、朝鮮に接し、西は月氏を逐ふて、氏羌に及び、南は樓煩を併せて、悉く秦の侵地を復し、漢の高祖の九年には、南侵して、晋陽(山西省)に至り、高祖の親征するや、之を誘つて、白

匈奴

第二、第三、第四、第五、第六、第七、地圖参照

登城に圍み、後遂に漢と和親を結びしと雖、未だ全く南下の念を斷たざりき。

冒頓死して、老上單于嗣き、屢來つて漢の北邊を侵し、が武帝の立つに及んで、漢將衛青、霍去病、李廣利等の爲に大打撃を被り、宣帝の時に至つては、更に南は漢兵に破られ、北は丁零に攻められ、東は烏桓に迫られ、西は烏孫に撃たれ、國勢頻りに縮りて、五單于内に分争せり。既にして匈奴は全く二單于の分領する所となりしが、呼韓邪單于是漢に降りて、藩臣と稱し、邛支單于是康居に走りて、都護甘延壽の爲に殺され、爾後王莽の政柄を握つて、怨を單于に買ふに至る迄、匈奴は常に漢の威令を奉ぜり。

東漢の初に當りて、匈奴は南北に分れ、南匈奴は漢に内附して、西河美稜の地を賜はられ、北匈奴も尋で來つて和を求めしが、明帝の

立つに及んで、北匈奴は漢兵の爲に右臂を撃たれ、國勢日に傾きて、内訌頻りに起り、章帝の世に至りては、南匈奴、丁零、鮮卑、西域諸國等亦其衰亂に乗じて、四方より之を攻めしかば、北匈奴は遂に自立する能はずして、遠く北に退き、其の五十八部皆漢に降れり。安帝の時、鮮卑は更に其遺族を滅し、靈帝の時には、南單于の統亦斷絶して、匈奴は全く漢人種に對抗するの力を失ひ、鮮卑之に代つて、漸く強大となれり。

第二節 烏桓及び鮮卑は、共に蒙古種にして、周代には東胡といへり。西漢の初め、匈奴の冒頓に逐はれて、内蒙古の東部に逃れ、始めて二分して、烏桓、鮮卑となれり。

烏桓は、初め烏桓山を保ちて、匈奴に臣事せしが、稍強大なるに及んで、之に叛きて漢に内附せしかば、武帝は之を利用して、匈奴の債

烏桓

察を爲さしめたり。王莽の時には、匈奴と共に漢に叛きしと雖、後漢の興るに至つては、再び之に朝貢して、光武の封爵を受けたり。其後ち烏桓は遼西、遼東、上谷、右北平の四部に分れ、就中遼西の大入最も強盛にして、漢末には張純、袁紹等を助けたりしが、遂に曹操の爲に討滅せられたり。

鮮卑

第三節 鮮卑は、鮮卑山を保ちし者にして、後漢の初めより遼東に入りて、漢に朝貢せり。和帝の時、匈奴の地を併せて、漸く強大となり、桓帝の時、檀石槐なる者起りて、北は丁零を拒ぎ、東は扶餘を退け、西は烏孫を撃ちて、盡く匈奴の故地を奄有し、東西四千里、南北七千里に亘り、之を分つて、東中西の三部となせり。

三國の時に至りて、軻比能あり、亦勇健にして、諸部を威服し、屢南下して、魏の幽、并、二州を侵略せしが、幽州の刺史王雄の爲に殺さる

柔然

ゝに及んで、種落離散して、國祀全く其跡を絶てり。然れども、鮮卑の支族は是より彌盛にして、西晋の末には、中國に入りて、前燕、後燕、西秦、南燕、南涼等の國を立て、索頭部の拓跋氏は後魏を興して、淮漢以北を一統せり。

第四節 鮮卑の後にして、塞外に強國を建てし者二族あり、柔然及び吐谷渾是なり。柔然は又蠕々と稱す、拓跋力微の末、車鹿會より起れり。車鹿會より數世にして、社崙あり、魏の道武帝に逐はれて、高車に入り、傍近の諸部を併せて、自ら可汗と號し、其地西は焉耆に接し、東は朝鮮に及び、北は沙漠を渡り、南は大磧に臨み、屢來つて魏の邊患をなせり。

然れども、魏の太武帝の之を親征せしより、其國勢漸く衰頽し、魏末に至りて、少しく再興せしと雖、久しからずして復突厥の爲に破

吐谷渾

られ、後ち周の文帝は其主以下三千餘人を捕へて、之を突厥に交付せり。

第五節 吐谷渾は慕容廆の庶兄なりしが、西晋の末に當つて、國を隴西に建て、孫葉延に至つて、祖名を以て國號となせり。數世を経て、阿柴あり、氏羌を併せて、地方數千里に及び、西魏及東魏に叛服して、常に其の恐るゝ所たりしが、隋に至りて煬帝の爲に撃たれ、唐に至りて太宗の爲に征せられ、尋で吐蕃の爲に併吞せられたり。

第十章 西域諸國

第一節 漢人種が始めて西域諸國と交通を開きしは、西漢の武帝の世なり。是より先き、月氏は匈奴に逐はれて、伊犁に至り、再烏孫に逐はれて、中亞細亞に逃れ、大夏を滅して、アム河（オクサス河）

西漢の西域

の北に都を定め、大月氏と稱して、彌盛大なりしが、武帝は張騫を遣はして、之と共に匈奴を討たんことを謀り、事成らざりしかども、東西の交通は是より開け、葱嶺以西の文化、漸く漢土に流傳するに至れり。

西漢の西域は、三十六國ありて、皆漢の使命を奉じ、漢は宣帝の時より西域都護を烏壘城に置きて、之を統御せり。今其の著名なる國名を歴舉すれば、葱嶺以東には、鄯善、于闐、莎車、疎勒、烏孫、龜茲、焉耆、車師等あり。葱嶺以西には、大宛、康居、大月氏、大夏、安息、身毒等あり。就中、大夏、安息、身毒の三國は、白人の建てし國々にして、其文物遙に他の諸國に勝り、通商も亦盛に行はれしものゝ如し。

第二節 西漢の衰亡するや、西域諸國は皆王莽に畔きて、匈奴に屬し、後漢の興るに及んで、復其都護を仰がんことを光武に乞へり。

東漢の西域

然れども、光武は鎖國主義を執りて、西域都護を置かず、堅く玉門關を閉ぢて、西域の交通を斷ちしが、明帝の立つに及んで、假司馬班超の威令を西域諸國に布き、明帝は都護及び戊己校尉を置きて、之を鎮撫せしめたり。

後ち章帝の時に至り、西域再び叛きて、漢の都護を攻殺し、北匈奴亦之に加して、二校尉を攻めしかば、帝は將に西域諸國を棄てんとせしが、班超獨り疎勒に留りて、月氏、莎車、龜茲、姑墨等の諸國を平定し、遂に西域五十餘國の都護をして、龜茲に駐在せり。然れども、班超年老ひて、國に歸るに及び、撫御其方を失ひて、諸國復た畔き去れり。

第三節 是より先き、大月氏は益南侵して、カプールに至り、更に

起 罽賓の興

印度の北部を略して、カシミルに罽賓國を建て、其版圖北は浩汗に起りて、南はグザラットに至り、西はカプールに起りて、東はヂヤムナ河に達せり。後漢の初めに當りて、其王に迦膩色迦といへる者あり、厚く佛教を信じて、布教に力を用ひたりしかば、所謂大乘教なる者興りて、東西に流布するに至れり。

第四節 大乘教は、歐人の北派佛教といへる者にして、其支那に入りしは、後漢の明帝以後の事なり、但し佛教の、秦の時より已に中國に密傳せしは、殆ど疑ふ可らずと雖、帝室の之に歸依せしは、實に明帝が蔡愔、王導の二人を西域に遣はして、經典を求めしに生まれり。時に西域にては、罽賓全盛の世にして、佛教は勃興の機運に向ひ、馬鳴、龍樹等の諸名僧前後相繼ぎて、大乘教を唱へたりしかば、支那は之が影響を被りて、重に大乘教を輸入し、魏晉より南北朝に至

北派佛教
の東流

りて益隆盛に赴けり。

西紀三百七十二年に、秦主苻健、僧順道を高句麗に遣はして、始めて佛教を海東に傳へ、後十二年を経て、東晋は摩羅難陀を百濟に遣はして、之が洪通を圖らしめ、高句麗は更に之を新羅に傳へ、百濟は之を我日本に傳へたり。實に西紀五百五十二年にして、欽明天皇の十三年なり。又安南、臺灣、蒙古等には、四五世紀の頃、支那より佛教を傳へ、西藏には、七世紀頃印度のチハールより傳へたり。

安息の興亡

第五節 佛教の西漸を説かんには、先づ安息の事を一言せざる可らず。安息は波斯のバルチャ朝にして、アルサセスの開きし者なり。大夏の盛なりし間は、之と力を併せて、セリウユス家に反抗し、大夏衰へて後ちは、其古地を蠶食して、大に境土を廣め、北は裏海の南岸に至り、南は波斯灣に及び、東は印度河畔に接し、西は

佛教の西漸

メソポタミヤに達し、國勢日に盛にして、一時は羅馬兵をも苦めたりしが、西紀三世紀の中頃に至りて、遂に撒々朝の爲に滅されたり。第六節 佛教の西流は、摩竭陀國阿輸迦王の布教時代に始まり、當時既に大夏に及び、後ち迦膩色迦王出で、罽賓佛教の中心となるや、其の西流は益盛にして、殆どイラン高原を浸染せり。

罽賓は多く逃れて、安息に投じ、佛教の中心も之と共に安息に移りたりしが、安息亦衰ふるに及んで、其佛教は東西に分れ、一は東に向つて、土耳其斯坦、蒙古、支那等に流布し、一は西に向つて、アッシリア、亞刺比亞、埃及等に流傳せり。然れども、此地方の佛教は、後ち基督教、モハメッド教等の爲に壓倒せられて、今は根跡だも留めざるに至れり。

第三編 隋初より唐末にいたる

第一章 隋の興亡

文帝及煬帝

以下第八
地圖参照

第一節 隋の高祖文皇帝は、南北兩朝を一統してより、専ら心を内治に用ひ、勤儉を尙んで、身を以て群下を率ひたりしかば、海内一時小康を得たりと雖、帝弒せられて、煬帝の立つに至り、内は奢侈に耽りて、或は苑囿を作り、或は宮殿を營み、又或は運河を開きて、敢て下民の衰弊を顧みず、外は無名の師を動して、南は林邑を平げ、西は吐谷渾を破り、北は突厥を服し、東南は琉球を伐ち、遂に大に高麗を征して、戦利あらざりしかば、天下麻の如く亂れて、群雄各地に蜂起

隋末の騒亂

せり

第二節 今その著名なる者を歴舉すれば、竇建德は漳南(山東省)に據つて、長樂王と稱し、李密は洛口倉(河南省)に據つて、魏公と稱し、劉武周は馬邑(山西省)に據つて、定陽可汗と稱し、薛居は瀧西(甘肅省)に據つて、西秦の霸王と稱し、李軌は河西(甘肅省)に據つて、涼王と稱し、蕭銑は江陵(湖北省)に據つて、梁王と稱し、林士弘は鄱陽に據つて、楚帝と稱し、梁師都是朔方(オルトス)に據つて、梁帝と稱せり。是に於て、唐公李淵も其の子世民に勧められて、兵を大原(山西省)に興し、頻りに諸郡に勝つて、進んで長安に到り、煬帝を廢して、恭帝を立て、尋で其の禪を受けて、唐の高祖神堯皇帝となれり、時に西紀六百十八年、我國推古天皇の二十六年なり。

第二章 唐の初葉

群雄の平定

第一節 高祖既に位に即きて、中原に君臨せしといへども、各地の群雄は未だ依然として、唐の威命を用ひず、王世充は洛陽に據り、李子通は江都(江蘇州)に據り、薛仁果は文舉に嗣ぎて、帝と稱し、沈法興は毗陵(江蘇省)にありて、梁王と稱し、此他李軌、蕭銑、竇建德、等も、亦皆其の故地を保ちて、互に天下を争ひたりしが、秦王世民は、前後七年にして、概ね皆之を平定せり。

太宗の内治

第二節 世民功を以て高祖の禪を承け、位に上りて太宗皇帝となれり。太宗は秦王たりし時より、既に高祖を扶けて、内政の改革を圖りたりしが、位に即くに及んで、益心を政治に注ぎ、弘文館を設けて、文學を奨励し、府兵を置きて、武備を嚴にし、驕奢を戒めて、賦役

太宗の武略

を薄くし、刑辟を軽くして、専ら下民を撫恤せしかば、海内皆悦服して、徳化四方に流布し、所謂貞觀の治を致すに至れり。蓋し杜如晦、房玄齡、魏徵、王珪、等の賛翼與つて大に力ありしなり。

第三節 太宗は、内治の緒に就くに及んで、漸く外征の師を出し、李靖を遣はして、突厥を伐たしめ、殷志玄を遣はして、吐谷渾を征せしめ、侯君集を遣はして、吐蕃、高昌、西突厥、等を平定せしめ、貞觀十八年には、親しく兵を率ひて、高麗を征し、遼東、白巖の二城を下して、安市城を圍みたりしが、偶、天寒く、糧乏かりしを以て、遂に志を得ずして、師を班せり。此他李世勣は命を奉じて、薛延陀を討滅し、王玄策は印度に使用して、中天竺王阿羅那順を擒にして歸り、高侃は西突厥を討ちて、悉く其の諸部を下せり。

唐の國威

第四節 是に於て、唐の國威は遙に四裔に振ひ、東は鴨綠江を踰

以下第九
地圖モ參
照

へ、西は ヒンヅークーシユ 山に跨り、南は安南に至り、北は エニセイ
スク (骨利幹) に及べり。而して高宗亦太宗の遺志を繼ぎて、頻りに遠征の師を出し、西突厥、高麗、百濟、新羅等の諸國を平定せしかば、
玄宗の時に至りては、羈縻府州の數八百の多きに達し、唐は六都護を置きて、世々之を統治せり、即ち安東都護は朝鮮を治め、安北都護は漠北を治め、單于都護は漠南を治め、北庭都護は西北を治め、安西都護は西域を治め、安南都護は南海諸國を治めたり。

武韋の禍

第五節 則天武氏は、素と太宗の才人なりしが、高宗の立つに及

んで、入つて昭義となり、尋で王后を退けて、自ら后位に進み、國政に參與して、權人主に等しく、太子を廢立すること、一に其の意に任せり。殊に高宗崩じて、中宗の立つに至つては、武氏は皇太后となり、政柄を掌握し、僅に二ヶ月にして、中宗を廢して、豫王旦を立て、天

下の己に服せざるを知りて、大に誅殺を行ひ、殆ど皇族を夷滅して、國號を周と改め、自ら號して神聖皇帝といへり。

武氏は、斯くの如くにして、唐の天下を奪ひしと雖、性明敏にして、能く人材を擧用せしかば、將相皆其の人を得て、國政更に滯滞せず、殊に狄仁傑の如きは、最も忠實に之が用をなし、武氏も亦之を重んじて、悉く其の諫を納れたり。但し晩年に至りては、武氏政を親らせず、嬖人張易之、張昌宗の二人専ら事を用ひて、朝政大に紊亂せしかば、宰相張柬之は宮中に入りて、此二人を斬り、武氏に迫りて、位を中宗に讓らしめたり。

中宗位に復して、唐政再び行はるゝに至りしと雖、皇后韋氏亦久しからずして、第二の武后となり、武三思と通じて、國政を恣にし、遂に帝を弑して、溫王重茂を立て、多く同族を引きて、自ら大政を攝行

せしが、遂に臨淄王隆基の爲に誅滅せられたり。隆基は後ち帝位に上れり、玄宗皇帝即ち是れなり。

第三章 唐の末葉

安史の亂

第一節 太宗は、府兵の制を設けて、諸要地に都督府を置きたりしが、後ち其の制破れて、節度使なる者を生じ、數州を合せ鎮して、土地、財賦、甲兵の三權を掌握せしかば、其の勢益々強大となりて、遂に所謂藩鎮の患を起せり、而して其の最も甚しきを、安史あんしの亂とす。

安祿山は、素と突厥の降將なりしが、性狡黠にして、才略あり、深く玄宗の信任を得て、平盧直隸省の節度使に擢でられ、尋で范陽直隸省の節度使を兼て、爵を東平郡王と賜はり、勢威全く北方を壓して、漸く唐を輕んずるの志を起し、天寶十四年西紀七百五十五年に至

りて、遂に反旗を翻し、諸部及奚、契丹の兵十五萬を率ひ、南侵して洛陽を陥れ、自ら號して、大燕皇帝といへり。

是に於て、顏真卿、顏果卿、郭子儀、李光弼、等各勤王の師を興して、之を禦ぎしと雖、賊勢日に盛にして、進んで長安に向ひ、帝は倉皇宮を出で、蜀に走り、回訖の兵を借りて、僅に之を支ふことを得たり。然れども、久しからずして、賊軍中に内訌起り、祿山は其の子慶緒に弑せられ、慶緒は其の將史思明に弑せられ、思明も亦其の子朝義の爲に弑せられしかば、賊勢痛く衰へて、官軍漸く其の侵地を恢復し、既にして賊將李懷義の朝義を斬つて、出で降るに及び、八年の戰亂始めて平定せり。

第二節 安史の亂は斯くして平ぎしと雖、藩鎮の專横は是より益甚しく、節度使は或は子孫の世襲する所となり、或は姦將の篡奪

藩鎮の跋扈

する所となれり。然れども朝廷軟弱にして、之を制すること能はず、皆其の請に任せて、妄りに任命を行ひしかば、諸鎮の驕暴云はん方なく、或は相黨援して、朝命を拒み、或は一方に割據して、帝と稱する者あるに至れり。

然れども、憲宗立つて、杜黃裳の議を用ひ、姑息の政策を改めて、武力を以て諸鎮に對し、先づ劉闢、李錡、元濟等を征したりしかば、始めて其の大患を除くことを得たり。

第三節 唐の末路は、宦官の專横と朋黨の争とを以て、殆ど歴史の全局を掩ふの觀あり。今其の梗概をいはんに、宦官は中宗の時より漸く用ひられて、玄宗の時には其數三千人に達し、德宗以後は公然軍國の大事に參與して、勢威彌甚しく、啻に歷世人主の廢立を恣にするのみならず、憲宗、敬宗、二帝の如きは、全く其の弑殺する所

宦官の專横

となれり。

文宗は夙に宦官の專横を惡みて、之が誅夷の策を講じ、李訓亦帝の旨を受けて、甘露の變を企てしと雖、事遂に成らずして、却て其の暴威を高め、後ち朱全忠の出るに至る迄は、敢て之に抗するの力ある者あらざりき。

第四節 朋黨の争は、穆宗の世に始まりて、宣宗の世に終り、其の國政を攪亂せしこと、實に四十餘年に亘れり。穆宗の時、李德裕は翰林學士にして、李宗閔は中書舍人なりしが、故ありて互に隙を生じ、德裕先づ宗閔を構貶して、劍州(四川省)の刺史となせり。

是に於て始めて朋黨の端緒を開き、互に黨人を率ひて、政權を争奪し、文宗以後は、宗閔更に牛僧孺を引き、其の援となし、所謂李牛の黨を結び、德裕の黨に當り、兩黨内閣に出入すること、前後數回

朋黨の争

に及び、紛紜騷擾として、殆寧歲なかりしが、宣宗の世に至りて、三首領共に死亡し、始めて黨人の軋轢を絶つに至れり。

唐の滅亡

第五節 唐の初世は、太宗の後を承けて、國礎極めて堅く、文化の盛なるは周室に比すべく、境土の廣大なるは、遙に秦漢を凌駕せしと雖、中葉以後は藩鎮の患ありて、政令地方に行はれず、且つ宦官は宮中に跋扈し、朋黨は朝政を蹂躪せしを以て、國勢漸く傾きて、群盜四方に起り、殊に黃巢の長安を奪ひて、大齊皇帝と僭號せしよりは、近畿は全く姦雄の巢窟となれり。

此時に當りて、朱全忠なる者あり、窃に天子を挾んで、天下に號令するの志を懷き、同平章事崔胤と結びて、先づ宦官を誅滅し、尋て胤を介して、自ら相國となり、遂に哀帝の禪を受けて、梁の太祖となれり、時に西紀九百七年、我國醍醐天皇の延喜七年なり。

第四章 隋唐の制度及學術

唐制

官制

田制

第一節 唐の制度は、嘗て我國の移用せし所なれば、今爰に其の一斑をいはん。先づ官制は、中央政府に尙書、中書、門下、秘書、殿中、内侍の六省あり、就中尙書省は最も樞要の位置を占めて、吏、戶、禮、兵、刑、工の六部に分れ、又別に一臺御史臺、五監國子、少府、將作、軍器、都水、九寺(大常、光祿、衛尉、宗正、太僕、大理、鴻臚、司農、大府)十六衛府ありて、文武の諸政を掌れり。地方には、府に牧尹あり、州に刺史あり、縣に令ありて、民治を掌り、都督府、都護府ありて、軍政を掌れり。次に田制は、班田の法を用ひて、毎年十月より十二月の間に、田園を收授し、丁男には百畝、老病の者には四十畝、寡妻妾には三十畝を給せり。又税法には、租、庸、調の三種目を設け、租は百畝の田より粟

二石、庸は一歳に二十日、調は其の産する所に従ひて、絹、綾、絁、各長さ二丈、麻布(二丈四尺)の類を出さしめたり、但し以上は唐初世の制にして、玄宗以後は痛く衰敗せしかば、徳宗の時より兩税の法を設けたり。兩税とは、夏秋二期に徴收する者にして、毎歳州縣の費と其上供の數とを計りて、之を人民に賦課せり。

兵制は、太宗の時天下を分つて、十道となし、折衝府(上府千二百人、中府千人、下府八百人、六百三十四)を置きて、京師の諸衛府に番上せしめ、凡そ民は、年二十にして兵となり、六十にして之を免する規定なりしが、玄宗の朝に至りては、其制大に亂れて、新に曠騎の法起り、京畿の府兵及白丁十二万を募りて、諸衛に隸せしむる事となれり。然れども、其後曠騎の法も亦亂れて、藩鎮の兵益強大となり、中央政府遂に之を制する能はざるに至れり。

兵制

法制

最後にいふべきは、法制なり。唐は、隋の舊によりて、律十二篇(名例、衛禁、職制、戶婚、厩庫、擅興、賊盜、鬪訟、詐僞、雜律、捕亡、斷獄)を設け、刑名は、分つて笞、杖、徒、流、死の五種となし、之に附するに、十惡、八議を以てせり。我國の大寶律は、殆ど之と同一にして、十惡を改めて、八虐とし、八議を改めて、六議となし、者なり。

儒學

第二節 隋唐二代は、前代と異りて、大に學制に意を注げり。殊に唐は、京師に國子學、大學、四門學、律學、書學、算學、私文館、崇文館等を設け、府、州、縣にも、亦各學校を建て、士民の教育に力を盡し、且つ秀才、進士、明經、明法、明算、明字等の諸科を設けて、士を登庸せしかば、唐の學術は、遂に漢、魏、晉を凌ぐに至れり。

然れども唐の儒學は、所謂註疏の學にして、太宗の時、孔安國、顏師古等に命じて、五經正義を撰ばしめ、易は王弼の註を用ひ、書は孔安

國の傳を採り、詩は毛萇の傳、禮記は鄭玄の註、左傳は杜預の註と定めて、各其疏を作りしより、註疏の學は大に發達せしと雖、學者皆正義を墨守して、敢て新機軸を出す者なく、高尚なる哲學思想は、却て老佛の徒に求むべきに至れり。

第三節 之に反して、詩文は唐に於て非常なる發達を遂げたり。勿論唐の初めには、未だ六朝の弊風を存して、詩は浮華に渡り、文は駢儷に傾くことありしと雖、玄宗以後は全く此弊を矯めて、支那文學史上に、一新時期を開けり。當時文章を以て世に鳴りし者には、韓退之あり、柳宗元あり、共に力を盡して、古文の恢復を圖り、遂に能く八代の衰を興して、之を周漢醇朴の古に反へせり。殊に韓退之は當時獨歩の儒學者にして、大に排佛論を唱へし人なり。次ぎに、詩を以て不朽の名を後世に垂れし者には、李白、杜甫、白居易

詩文

易の三人あり。韓退之も亦詩を能くして、以上の三人と合せて、四大家と稱せられたり。此他尙ほ王維、岑參、孟浩然、韋應物、元稹、杜牧等ありて、皆一家をなせり。

第五章 隋唐の宗教

佛教

第一節 佛教は、南北朝の餘威を受けて、益隆盛となれり。殊に唐の太宗の時には、有名なる玄奘三藏出で、遠く葱嶺を越へて、印度に遊び、十七年の歳月を費して、梵典六百十餘部を集め、國に歸りて、之が翻譯に従事し、遂に七十四部、千三百三十八卷を譯了せり、所謂新譯是なり。

其後義淨三藏亦印度に赴きて、經典を求め、玄宗の時には、開元の三大士(善無畏三藏、金剛智三藏、不空三藏)相つぎて印度より來り、文

宗の時には、寺數四萬を越へ、僧尼の數七十餘萬に達し、宗派には、三論、佛、華嚴、禪、法相、天台、眞言、淨土等ありて、皆盛に四方に行はれ、其餘響は引いて我日本に及べり。然れども、武宗の世に至りて、厚く道教を信じ、大に佛徒を虐遇して、寺院四萬を毀ち、僧尼二十七萬人を還俗せしめたり。

道教

第二節 道教は、方士の徒が老子の學に附會して、作りし者にして、漢、魏、晋の際には、張陵、張冉、葛洪等ありて、盛に神仙の術を講じ、後魏の初には寇謙之ありて、大に太武帝の尊信を受け、始めて佛教と對抗するの域に進めり。

而して唐に至りては、國姓李にして老子の姓と同じかりしより、遂に方士の説を信じて、老子を以て國祖となし、廟を建て、尊號を奉りて、頻に之を崇敬し、或は天下に令して、道德經を各戸に藏せしめ、

或は崇玄館を設けて、玄學を講究せしめしかば、道教は益隆盛を致し、方士は帝に庶民の崇敬を受くるのみならず、往々高位、高官に上る者あるに至れり。

回教

第三節 回教は、亞刺比亞のモハメッドが開きし宗教にして、サラセン帝國の勃興と共に、シリヤ、波斯は云ふに及ばず、亞弗利加、西班牙等に盛に流布せしが、唐の初に當りて、亞刺比亞の商賈は海上より來つて、廣東地方に貿易を開き、ハグダッドのカリフ(回教主)は、其母を遣はして、好を唐に通ずるに至り、回教も、太宗の許可を得て、公然廣東地方に宣傳せらるゝに至れり。

景教

第四節 景教は、キストリウス派といへる、基督教の一派にして、夙にシリヤ、波斯地方に流行せしが、唐の太宗の時(西紀六百三十六年)に當りて、其の徒、ナロホン(阿羅本)なる者、經典を持して長安

に來れり。是に於て、太宗は之に命じて、其經典を翻譯せしめ、且つ大秦寺を建て、僧を度せしめたり。其後高宗、玄宗の二帝亦之に繼ぎて、其の布教を獎勵せしかば、景教は漸く社會の上下に行はるるに至れり。但し武宗の時に及びて、佛教と共に抑へられ、遂に全く廢絶に歸せしと雖、其の武宗以前に盛なりしことは、徳宗の世に建てられし、大秦景教流行中國碑に由て、推想せらるべきなり。

祇教

第五節 祇教は西紀前千年頃、バクトリアのゾロアスタが開きし教にして、波斯の拜火教といへる者はなり。其の西域諸國を経て、支那に入りしは、蓋し南北朝以後の事なり。唐の太宗は嘗て波斯寺を建て、其の布教を許せり。

摩尼教

摩尼教は波斯、ササン（撒々）朝の頃、マニ（本名をクブリスといふ）の開きし教にして、拜火教と基督教とを折衷せし者なり。其

の中心は、當時、バビロンにありて、東西に流布し、西は羅馬に入り、東はサマルカンドを経て、支那の北部に入れり。されど以上二教は、支那に在つては、其勢力微弱なりし者なり。

第六章 海東諸國

第一節 此時代に至りても、朝鮮の三國は尙ほ依然として鼎立し、或は百濟、新羅と力を協せて、高麗の侵略を防ぎ、或は新羅、高麗と通じて、百濟を苦めたりしが、隋の煬帝の時に至りて、高麗は隋兵の侵入を被れり。是より先き、海東諸國は、多く皆隋に朝貢せしと雖、獨り高麗は其の強大を頼みて、隋の招きに應ぜず、殊に隋初には、靺鞨の衆を率ひて、遼西を侵し、且つ使を遣はして、款を突厥に納れたり。

隋と高麗との交渉

以下第九
地圖参照

高麗の滅亡

是に於て隋の煬帝は、大に征討の師を興し、親ら之に將として、遼東に來り、海陸兩路より平壤を攻撃せしめたり。然れども、城堅くして遂に抜くこと能はず、諸將は軍を班して、高麗兵の追撃を受け、三萬五千の大兵皆潰走し、遼東に達せし者、僅に二千七百人なりき。

第二節 隋亡びて、唐の興るに及び、高麗は百濟と力を合せて、新羅を謀りしかば、新羅は使を遣はして、援を唐に請へり。是に於て唐は、璽書を高麗王に與へて、新羅と和せしめたり。然るに、高麗王は其の命を奉ぜずして、却て唐使を屈辱したりしかば、太宗大に怒りて、高麗征討の師を興し、李世勣、張亮、等と共に、親しく諸軍を督して、遼東に赴き、白岩城を陥れて、安市城に及べり。然れども、城兵死守して敢て降らざりしかば、攻圍六ヶ月にして、遂に師を班せり。斯くて、高麗は一時唐の侵撃を免かれしと雖、後ち太宗崩じて、高

百濟の滅亡

宗の立つに至り、唐は重ねて高麗の討滅を圖り、李世勣を遣はして、新羅の兵と共に平壤を攻陥せしめ、全く高麗を滅して、安東都護府を平壤に置けり、時に西紀六百六十八年なり。

第三節 此時、唐は亦既に百濟を滅せり。初め百濟は新羅を侵して、任那の故地を取り、且つ高麗と合して、新羅の北境を侵略せしが、新羅の急を唐に報じて、頻りに其の援を請ふに至り、高宗は蘇定方を遣はし、水陸兩軍を率ひて、百濟を伐たしめ、新羅の兵亦之に加はり、進んで國都を陥れしかば、國王義慈出で、唐軍に降り、六百餘年の國祀、遂に其跡を絶てり。

時に義慈の弟、豐璋質として、日本に在りしかば、國人之を迎立して、王となし、齊明天皇も親く舟師を率ひて、筑紫に赴き、阿曇比羅夫等を遣はして、之を助けしめ給ひしと雖、遂に志を得給はずして止

唐と新羅
との交渉

めり

第四節 百濟、高麗、二國の斯くして亡滅するや、新羅の文武王は、百濟の故地を蠶食して、唐の戍兵を襲ひ、又私に高麗王を冊立し、共に北侵して、鴨綠江を渡れり。唐將劉仁軌乃ち書を移して、其の異圖を責め、且つ兵を遣はして、平壤を攻めしめたり。

是に於て、文武王は上表して、罪を唐に請ひ、唐帝怒りて、王爵を削り、更に劉仁軌をして、來討せしむるに至りしも、尙ほ依然として、恭順の意を表し、使を遣はし、幣物を厚ふして、深く其の罪を謝せしかば、唐帝遂に王爵を復して、鷄林州大都督となせり。而して新羅は、後ち百濟の故地を取りて、高麗の南境に及べり。

第五節 高麗の亡びし後ち、遼東の地に、渤海といへる一強國興れり。其の先は、肅慎の裔にして、靺鞨の粟末部に屬し、世々高麗の

渤海の興
亡

北なる、今の松花江邊に住居せしが、大祚榮の時に至りて、唐の邊兵を破りて、震王と稱し、高麗の故地を略して、居を遼東に定め、悉く肅慎、扶餘の諸族を服屬して、勢威遠近に振ひ、遂に唐の玄宗の封を受けて、渤海郡王となれり。

其の子武藝益境土を開きて、今の平安、咸鏡、吉林、盛京の諸地を奄有し、始めて使を遣はして、我日本に通聘せり（聖武天皇神龜五年）。後ち欽茂の時に至りて、都を肅慎の故地に復し、國內に五京（上京龍泉府、東京龍原府、南京南海府、西京鴨綠府、中京顯德府）を設けて、其の勢益盛なりしが、唐亡びて五代の世となるに至り、契丹の太祖阿保機の爲に討滅せられたり。

第七章 西北諸族

突厥

以下第九
地圖参照

第一節 突厥は、北匈奴の支族にして、金山(甘肅省)の南に住し、世々柔然に臣たりしが、土門の時に至りて、始めて其の羈絆を脱し、木汗可汗の立つに及んで、西は柔然、嗾嗾の二國を破り、東は契丹を撃つて、之を走らせ、北は契骨を滅して、其の地を併せ、威令の行はるゝ所、東は遼東より、西は西海に至り、南は沙漠より、北は北海に及び、周、齊二國皆之と婚を結び、且つ府藏を傾けて、其の甘心を買ふに至れり。然れども、後ち幾もなくして、骨肉互に隙を生じ、邦土分裂して、東突厥及西突厥の二國となれり。

東突厥

東突厥は、隋の盛なるに當つては、一に之に服事せしと雖、其の衰ふるに及びて、始畢可汗立ち、契丹、室韋、吐谷渾、高昌等を臣として、勢

威日に盛なりしかば、中國の人にして、之に臣事する者、極めて多く、唐の高祖の如きも、亦嘗て其の兵を借れり。

既にして頡利可汗立ち、姪突利可汗と共に、兵を率ひて唐に侵入すること、前後二回に及びり。然れども、當時太宗は、機の未だ熟せざるを知り、之と和を結んで、務めて其の鋭鋒を避けたりしが、後ち突利は、頡利と隙を生じて、唐に入朝し、薛延陀は、回訖と共に叛きて、頡利を撃つに至り、李世勣、李靖等を遣はして、頡利の軍を陰山に撃破せしめ、遂に頡利を生擒して、全く東突厥を滅ぼせり。

西突厥

西突厥は、阿波可汗の建てし所にして、其の初めは、烏孫の故地を占領せしに過ぎざりしが、射匱の時に至りて、土宇を開き、東は金山に至り、西は西海に臨みたり。弟統葉護之に繼ぎて、亦攻戰を能くし、北は鐵勒を并せ、南は罽賓に至り、悉く西域諸國を霸有して、千泉

に都し、屢兵を出して、波斯のサ、ン朝を苦めしが、唐の高宗は、蘇定方等を遣はして、之を伐たしめ、沙鉢羅可汗を擒にして、其の地に、濛池、崑陵の二都護府を置けり。

回訖

第二節 回訖は、漢の丁零の後なる鐵勒の一部にして、嘗て高車と云ひし者なり。唐の玄宗の時に至りて、突厥を滅し、薛延陀を撃ち、其の版圖、東は室韋に接し、西は金山に至り、悉く東突厥の故地を奄有して、國勢彌盛なりしかば、玄宗は其の主を冊封して、懷仁可汗となし、殊に安史の亂以後は、唐室衰弱して、之に援兵を請ひ、金帛を贈り、和蕃公主を與へて、偏に其の意を迎へたり。然れども、其の後國勢漸く衰へて、黠戛斯の爲に破られ、積西に移りて、回鶻といへり。

吐蕃

第三節 吐蕃は、漢の西南夷の後にして、チベット（圖伯特）種に屬す。唐の太宗の時に當りて、其の主に棄宗弄讚あり、吐谷渾、黨項

等を破りて、松州（四川省）に侵入し、始めて唐と爭端を開くに至れり。當時太宗は、容易に之に勝つて、其の降を納るゝことを得しと雖、其後吐蕃は益強くして、悉く西南の地方を併せ、南は天竺に接し、北は突厥に隣り、西は龜茲、疏勒の諸鎮を陥れ、東は松州、茂州を侵せり。高宗師を發して、之を征せしと雖、常に其の逆撃する所となりて、唐威を西南に張ること能はず、殊に代宗の時に至りては、吐蕃の兵深く侵入して、長安に及び、帝は出で、狹州に走れり。而して當時唐は内亂の後を承けて、國力痛く衰耗し、郭子儀の力に由りて、僅に之を退くることを得しのみなりしかば、吐蕃之に乗じて、或は回訖と共に來侵し、或は高昌と共に入寇し、唐の世を終る迄、西邊の地は常に其の害を被れり。

第八章 西亞の形勢

サラセン
人の勃興

以下第九
地圖参照

第一節 六世紀の下半紀に當つて、亞刺比亞のメッカより一偉人起れり。之をモハメッド又はマホメットと名く。年少なりし間は、叔父の家に養はれて、牧畜を業とし、成人の後は、一賈人に雇はれて、専ら商事に従ひしが、漸く老境に近く、及んで、豫言者を以て自ら任じ、猶太教及基督教を排して、新宗教を唱へ、國人を教化して、一大勢力となし、遂に干戈を以て、布教の方便となせり。

モハメッドは、西紀六百三十二年を以て没せしと雖、之に繼ぎて法王たりしカリフ等は、代々サラセン人を率ひて、諸國の征服を謀り、十有餘年にして、シリヤ、波斯、及び埃及の三國を略取し、更に兵を東西に出して、西は西班牙に至り、東は印度の西部に及べり。

バグダ
ドの文化

第二節 ダマスカス（シリヤに在り）のカリフ、一時は此の大國を一手に總轄したりしが、八世紀の中頃に至りて、内訌の爲に東西二國に分れ、東はチギリス河畔のバグダッドに都し、西は西班牙のエルドバに都せり。

斯くてバグダッドのカリフは、西班牙を失ひたりと雖、尙ほ亞細亞及亞弗利加を領して、希臘帝國と文武の二權を争ひ、バグダッドは東西文明の中心となりて、通商貿易大に興り、アルメニア、コンスタンチノープル、埃及、亞刺比亞等の商賈は云ふに及ばず、印度、西藏、チニルキスタン地方の商隊も皆、此處に會して、有無を交通し、且つ歐亞二洲の商船は、盛に波斯灣を経て、チギリス河を上下せり。

第三節 支那と西域諸國との交通は、漢代より開け、桓帝の世には既に海上の交通も始まりしと雖、其後中國の勢威漸く衰弱して

東西の交
通

東西の往來も稍疎となれり。唐の代に至りて、再び之を恢復し、管に商隊に由りて、互に陸路を往來せしのみならず、亞刺比亞の商船は、續々として印度を経て支那に來り、廣東、乍浦、寧波、福州等の地に於て、貿易を營みたりしかば、西亞諸國の宗教も、之と共に東流して支那に入れり。

第四編 五代の初より宋の終に至る

第一章 五代の交立

五代の概見

以下第十
地圖参照

第一節 唐の亡びてより、宋の興るに至る迄を五代の世と稱す。蓋し梁、唐、晋、漢、周の五國相繼ぎて、中原に興亡せしが故なり。されど、此の間に國を唐土に建てし者は、晉に以上の五國のみならず、吳、南唐、前蜀、吳越、楚、閩、燕、南漢、荆南、後蜀、南唐、北漢、湖南等の諸國も、亦一方に割據して、互に天下を争へり。是を以て、五代の領有せし地は、僅に江北の一部分に過ぎず、就中唐の領地は最大なりしと雖、尙ほ支那本部の四分の一のみ、殊に梁の如きに至つては、黃河兩岸の一

梁の興亡

片土を有せりといふも不可なきなり。

第二節 梁の太祖朱全忠、唐の禪を受けて、帝位に即くや、強藩は皆既に各地に據つて、王と稱せり。即ち李克用は晋陽(山西省)に據つて晋王と稱し、楊行密は淮南(安徽省)に據つて吳王と稱し、廷建は成都(四川省)に據つて蜀王と稱し、王審知は福州(福建省)に據つて閩王と稱し、錢鏐は杭州(浙江省)に據つて吳越王と稱し、馬殷は潭州(湖南省)に據つて楚王と稱し、劉仁恭は幽州(直隸省)に據つて燕王と稱し、劉隱は廣州(廣東省)に據つて南漢王と稱せり。

而して就中晋は最も強大にして、常に梁と對抗し、互に兵を出して、河北の澤潞、磁洛、祁の五州を争ひたりしが、李克用死して、其の子存勗の立つに至り、晋兵彌強くして、屢梁軍を破り、且つ燕を滅して、悉く北方を併せ、遂に大舉して、梁に侵入せり。時に梁は太祖既に

弑せられて、末帝位に在り、力を盡して、晋軍を禦ぎしと雖、存勗は連戦連勝して、大梁(河南省)に入り、全く梁を滅して、帝位に即けり、之を唐の莊宗皇帝といふ、時に西紀九百三十二年なり。

唐の興亡

第三節 莊宗洛陽に都して、唐に君臨するに及び、岐は使を遣はして入貢し、蜀は國を擧げて、降を請ひたりしかば、帝は漸く驕恣の念を生じて、意を政治に留めず、藩鎮爲に憤怨して、將士事を擧ぐるに至りしと雖、明宗之に代りて、能く國勢を挽回し、唐威四方に振ひて、海内一時平安を得たり。

然れども、後ち廢帝從珂の閔帝を逐つて、自ら帝位に上るに至り、石敬瑭を惡みて、其の鎮所を移さんとせしかば、敬瑭大に怒りて、命を奉ぜず、契丹の兵を借りて、洛陽を陥れ、唐を滅して、晋の高祖皇帝となれり、時に西紀九百三十八年なり。

晋の興亡

第四節 晋の高祖は、契丹の力に頼りて、天下を取りしを以て、東北の十六州を割きて、之に酬ひ、且つ契丹の臣と稱して、毎歳金帛三十萬を贈りたりしが、後ち出帝立つて、之を潔とせず、唯孫と稱して、敢て臣禮を執らざりしかば、契丹の主徳光は兵を率ひて、晋に入寇せり。

是に於て、帝は親ら軍を督して、其の兵を破り、始めて契丹を輕んじて、敢て國事を顧みざるに至りたりしが、契丹は益晋を怒りて、南下の策を講じ、遂に大舉して、來つて大梁を陥れ、帝及皇后を捕へて、晋を滅せり、時に西紀九百四十七年なり。

漢の興亡

第五節 此時、河東の節度使劉知遠は晋陽に在りて帝と稱し、契丹の退去するに及びて、都を大梁に遷せり、之を漢の高祖皇帝と稱す。當時、孟知祥は成都(四川省)に據りて後蜀を立て、李冕は吳に代

周の興亡

はりて南唐を興し、尋で閩を滅して、江南に雄視せり。既にして高祖崩じて、隱帝の立つに至り、鄴都の留主郭守威を忌みて、之を除かんことを謀りしかば、威は兵を率ひて、大梁に向ひ、帝は之を拒ぎて、遂に亂兵の爲に弑せられたり。是に於て、威は將士に推されて、帝位に上り、國號を立て、周といへり、時に西紀九百五十一年なり。

第六節 時に劉崇は晋陽に據りて北漢と稱し、南唐は楚を滅して、湖南に及び、南漢は江北を侵略して、其の十四州を收め、互に一方に雄視して、中原の覇權を争ひたりしが、世宗の世に至りて、劉崇は遼(契丹)の改號將と共に大舉して、周に入寇せり。是に於て、世宗は親ら兵を督して、之を高平に破り、更に進んで晋陽を攻撃せり。

其後、世宗は王景等を遣はして、後蜀を伐つて、其の四州を取らしめ、又親しく南唐を征して、江南の地を收め、將に遼を伐つて、悉く晋

の亡地を復せんとせしが、事半にして疾に罹りて崩ぜり。其の子恭帝乃ち代つて位に即きしと雖、宿將に趙匡胤なる者ありて、大に將士の心を收め、遂に其の擁する所となりて、恭帝の禪を受けたり。時に西紀九百六十年なり。

第一章 宋の初葉

第一節 趙匡胤天位に上りて、宋の太祖となるや、先づ藩鎮の跋扈と宿衛の暴横とを抑制せり。藩鎮は、唐末より五代を通じて、益專横なりしが、太祖は宰相趙普の計を用ひて、務めて文臣を以て之に換ふるの策を執り、且つ諸州に通判及運轉使を置きて、其の民軍、財の三政を奪はしめたりしかば、藩鎮の跋扈は、漸く其の跡を絶つに至れり。又宿衛の強横に對しては、一方には諸道の兵を選みて

太祖の政略

入衛せしめ、一方には、禁旅を分遣して、邊城を守らしむるの方針を執れり。

是に於て、内治は漸く整ひしと雖、五代以來各地に割據せし諸國は、未だ全く宋の正朔を奉ぜざりしかば、太祖は諸將を遣はして、湖南、後蜀、南漢、南唐等を討滅せしめたり。然れども、北漢及遼の二國は、尙ほ依然として、宋に下らず、北漢は後ち太宗の爲に滅されしと雖、遼は益強盛にして、永く宋の一大外患をなせり。

遼の入寇

第二節 遼は、初め宋と和好を通じたりしが、太宗の北漢を征して、更に兵を幽州(直隸省)に進むるに至り、遼の景宗大に怒りて、援兵を出し、宋軍を撃退して、幽州の圍を解けり。斯くて、兩國の平和全く破れしよりは、南北互に兵を出して、涿、朔、深、德等の諸州と争ひしが、遼兵は常に強くして、宋の北邊は連年其の來侵に艱めり。

西紀千四年に至り、遼の聖宗は更に大舉して、來つて澶州(直隸省)を圍めり。時に宋は眞宗の世にして、寇準同平章事たりしが、準は帝に勸めて、之を親征せしめ、聖宗の和議を通ずるに及びて、遂に澶淵の盟を結び、宋は毎歲絹二十萬匹、銀十萬兩を遼に贈ることを約し、且つ宋を兄とし、遼を弟として、互に其の兵を收めたり。

第三節 後ち眞宗崩じて、仁宗の立つに至り、趙元昊なる者西平府(甘肅省)より起りて、自ら大夏皇帝と稱し、傍近の諸州を侵して、益東下せんとせしかば、仁宗は夏辣、韓琦、范仲淹等を遣はして、之が防禦に當らしめしと雖、元昊は之に屈せずして、屢來つて、豐、延、渭等の諸州を侵し、西邊殆ど寧歲なくして、宋は將に河西の地を棄てんとするに至れり。

然れども、後久しからずして、宋、夏共に兵事に困弊し、仁宗元昊の

西夏の入寇

新法の争

和意あるを聞きて、使を遣はして、之を招きたりしかば、元昊乃ち之に應じて、來つて和を帝に求め、帝は之を封じて、夏國王となし、且つ銀、絹、茶、黄金、帶等を與へて、兩國の境界を確定せり。

第四節 宋室の外交は、斯くの如く多事なりしにも係らず、朝臣は之を顧みずして、妄りに黨争を起し、殊に神宗以後は新法の争ひありて、其の弊害益甚しかりしかば、遂に國力萎微して、金元の鋭鋒に當る能はざるに至れり。新法とは、神宗の即位二年に王安石が立てし新法律にして、青苗、均輸、預買、保甲、募役、保馬、方田等の諸法是なり。

就中青苗の法は、最も當時の社會に適せずして、下民之が爲に困厄に陥る者多かりしかば、保守主義の人々は、皆之を非難せしと雖、安石は堅く執りて、其の法を改めず、蘇轍、富弼、韓琦、范純仁、呂公著、歐

陽修等の反對家を退けて、韓絳、呂惠卿の二人と共に之を斷行せり。斯くて、神宗の世を終る迄、保守黨は敢て朝政に與ることを得ざりしが、哲宗立つて、皇太后高氏政を攝するに至り、司馬光登庸せられて、丞相となり、呂公著と力を合せて、悉く安石の新法を廢し、呂惠卿等を遠貶して、文彦博、程頤、蘇軾等を用ひたり。之を元祜の更化と稱す。

然れども、幾もなくして、司馬光薨じ、朝臣洛、川、朔の三黨に分裂して、互に相軋り、皇太后も尋で崩じて、朝政一變したりしかば、章惇、呂惠卿、蔡京、蔡卞等再び志を朝に得て、元祜の諸臣を退け、新法を復して、司馬光、呂公著等の謚號を追奪するに至れり、之を紹聖の紹述と稱す。

後ち哲宗崩じて、徽宗の立つに及び、章惇、蔡卞等罷められて、韓忠

彦、曾布等之に代はり、元祜、紹聖の二政を折衷して、大公至正の方針を執らんとせしが、久しからずして、忠彦は布と隙を生じ、朝政漸く紹述に傾きたりしかば、蔡京之に乗じて、入つて相となり、重ねて新法を行ひ、悉く元祜の諸臣を貶竄せり。而して京は其後相位に在ること、前後二十年に亘り、子弟親族朝に満ちて、勢威一世に振ひ、類りに土木を起して、敢て庶民の疾苦を顧みざりしが、金兵の南侵するに及んで、宋は悉く其の報を收めたり。

第三章 遼、夏の興亡

第一節 遼は、東胡の裔にして、元魏の頃より契丹と號し、其の地西は奚に隣り、東は高麗に接し、南は營州に至り、北は靺鞨、室韋に及び、五代の初めに當りて、其主に耶律阿保機あり、性豪勇にして、

契丹と五代との交渉

以下第十
地圖参照

侵略を好み、東は渤海を滅し、北は室韋及女眞を侵し、西は奚を破つて、悉く突厥の故地を併せ、臨潢(直隸の北)に都して、始めて帝と號せり、之を契丹の太祖と稱す。

太祖殂して、子太宗嗣ぎ、石敬瑭を援けて、晋朝を興し、幽、薊、檀、雲等の十六州(直隸、山西、及遼東)を收め、爾後晋を臣視せしが、出帝立つて、臣禮を執らざりしかば、太宗之を再征して、汴京(大梁)を陥れ、出帝を渤海に遷して、晋朝を滅し、國號を改めて、遼といへり。然れども、其後遼は弑虐相次ぎて、兵威漸く衰弱し、周の世宗の世に至つては、屢其の北侵を被りて、江北の數州を失へり。

第二節 宋の興るに及んで、景宗位に在り、國勢舊に復して、初めは好を宋に通じたりしが、幾もなくして、和好破れて、兩國互に兵を交へ、聖宗の世に至つては、更に大舉して、宋に侵入し、宋の太宗と澶

遼と宋金
との交渉

淵の盟を結びて、歲幣絹二十萬匹、銀十萬兩を得ることを約せり。宋の神宗の世に至り、遼は再び宋と地界を議して、新に百餘里の地を收め、國威益振ひて、西はバルカシ湖より、東は黃海に至る迄、敢て其の命を拒む者なきに至れり。

然れども、其後國運漸く傾き、黨項は諸部族と共に離畔し、西夏は之に乗じて屢兵を加へたりしが、此時に當つて、女眞に阿骨打なる者あり、黑龍江上より起りて、金國を立て、宋の徽宗と約して、遼を挾撃し、悉く其の五京(上京臨潢府、中京大定府、南京折津府、東京東平府、西京大同府)を降して、天祚帝を應州に捕へたり、時に西紀千百二十五年なり。是に於て、遼は全く亡びしと雖、其の族耶律大石は西に走りて、中亞細亞の諸部族を合せ、黑契丹を建て、遼の國祀を存せり。

西夏の興

第三節 西夏の先は圖伯特種にして、黨項の裔なり。唐の代に當りて、拓拔赤辭なる者あり、始めて中國に來歸して、夏州甘肅省を給はられ、後ち數世を経て、繼捧に至り、宋に入朝して、姓趙を得たり。從弟繼遷の立つに至り、初めは宋を去つて遼に屬し、且つ銀州(陝西省)に據つて夏王と稱したりしが、幾くなくして、復宋に歸して、河西、綏、銀、宥、靜の五州を得たり、之を西夏の太祖と稱す。

太祖崩じて、太宗嗣ぎ、復た遼、宋の二國に臣事して、西平王と稱したりしが、太宗崩じて、景宗の立つに至り、性雄毅にして、大略を懷き、回鶻を伐つて、瓜、沙、肅の三州を略し、自ら大夏皇帝と號して、頻りに宋の西邊を侵し、かば、宋の仁宗は韓琦、范仲淹等を遣はして、之を拒がしめたり。斯くて、宋夏の交戦數年に亘るに及び、景宗は漸く軍事に倦みて、和議を宋に通じたりしかば、宋は之を封じて、夏國王

となし、且つ銀二萬兩、絹二萬匹、茶三萬斤、及び黄金帶を贈りて、國界を確定せり。

當時西夏は、實に極盛の時代にして、其の領有は、甘肅、陝西、オルトスの全地に跨り、北は回鶻を斥け、東は遼、宋を壓せり。後ち三世にして、崇宗に至り、金の遼を討滅するに乗じて、款を金に通じ、爲に下塞より陰山に至るの地を割與せられしと雖、是より夏は金の藩屬となりて、頭角を上げること能はず、僅に一方に據守して、南平王暉の時に至り、元の太祖成吉思汗の爲に滅ぼされたり、時に西紀千二百二十七年なり。

第四章 金宋の争抗

第一節 金の先は、黒水靺鞨の後なり。其の地は黒龍江上にあ

金の勃興

以下第十
地圖参照

りて、東は海に瀕し、南は高麗に接し、嘗て唐の黒水府に屬したりしが、幾もなくして渤海の爲に併呑せられたり。後ち渤海亡びて、契丹の興るに及び、今の松花江以南は、契丹に入りて、熟女眞と稱し、以北は其の籍に入らずして、生女眞といへり。生女眞に完顔部あり、其の主綏可、居を按出虎水（アルチンスク）河の側に定めて、始めて國を金と號し、孫烏古廼に至りて、遼の眞宗の命を以て、生女眞の節度使となれり。

其の子阿骨打は、即ち金の太祖なり。太祖は、父の時より既に軍に従ひて、屢戦功を立てたりしが、其の兄に代はりて、生女眞の節度使となるや、直に遼に叛きて、寧江州を取り、更に進んで黃龍府を陥れ、自ら帝位に即きて、會祖の國號を移用せり。

第二節 此時に當りて、宋の童貫は、頻りに遼を滅ぼすの策を講

盟。宋。金の同

じ、嘗て遼に使用して、趙良嗣を得て還り、其の謀によりて、女眞と共に之を挾撃するの議を建てしかば、徽宗皇帝は、海上より使を金に遣はして、竊に其の意を通せしめたり。是に於て、金の太祖は直に返使を送りて、好を宋に納め、遂に遼の挾撃を議し、金は中京を取り、宋は南京を取り、事若し成らば、宋は南京附近の諸州を收め、金は宋の遼に贈りし歳幣を受けんことを約せり。

斯くて、金先づ兵を出して、上京及中京を陥れ、使を宋に遣はして、其の應撃を促し、かば、童貫乃ち大兵を率ひて、遼に向ひしと雖、其の兵常に遼軍の爲に破られて、南京に進むこと能はざりしかば、金は宋の出兵の期を失ひたるを責めて、頻りに前約を渝へんことを主張せり。

此時金は既に遼の四京を取りて、暫く宋軍の舉動を傍觀したりし

宋室の南渡

が童貫自ら功の成らざるを恐れて、密に其援を請ふに至り、金軍は三道より進み来て、南京を陥れ、尋で遼主を虜にして、全く遼を滅せり。

第三節 金は斯くして遼を滅ぼしたるを以て、前約の如く南京を擧げて、之を宋に與ふことを欲せず、其の租百萬を金に輸するにあらずんば、涿、易の二州を滅せんことを宋に要求せり。是に於て、宋は偏に其の意に従ひ、歲幣四十萬の他に、錢百萬緡を増さんことを約して、僅に南京及び薊、景、檀、順、涿、易(直隸省)の六州を得たりと雖、是より金は益宋を輕んじて、頻りに南下の念を燃せり。

當時金は太祖既に崩じて、太宗の治世なりしが、幾もなくして金の叛人逃れて宋に投ずるに及び、太宗は之を名として、兵を出して宋を侵さしめ、徽宗爲に位を避けて、修好を求めしと雖、太宗敢て之に應ぜず、金の諸將は直に進んで、京城(汴京)を圍めり。時に宋庭に

於ては、李綱堅く主戰説を主張せしと雖、宰相李邦彥の媾和の利を奏するに及んで、欽宗は之に聽きて和を金に求め、金二十萬兩、銀四百萬兩を出し、中山、大原、河間(直隸及山東)の三鎮を割き、且つ肅王樞を質として、金軍に赴かしめたり。

斯くて金軍は一旦圍を解きて、引去りしと雖、數月にして復來侵して、京城を陥れ、張邦昌を立て、楚帝となし、帝と上皇(徽宗)とを虜にして、北に還れり。時に西紀千百二十七年なり。是に於て、張邦昌は、孟太后と謀りて、高宗を立てしが、帝は金人の來侵を避けんが爲に、揚州(江蘇)に幸し、後ち更に臨安(浙江)に幸して、之を南宋の帝都となせり。所謂宋室の南渡是なり。

第四節 其後、金人の入寇益繁く、岳飛、張浚、韓世忠、宗澤等の諸將ありて、能く之を拒ぎしと雖、金兵或は汴に入り、或は關中に寇し、甚

秦檜の和議

しきは江を渡りて、杭越、明の諸州に及び、且つ金人の汴京に立てし、齊帝劉豫の兵も、屢南侵を企てたりしかば、宋相秦檜媾和を主張して、主戦論者を貶竄し、特に良將岳飛を殺して、漸く和議を整へ、宋は歳幣銀絹各二十五萬を納れ、金は徽宗の梓宮及章太后を還し、且つ淮水及秦山山脈を以て、國境となすことを約せり。

孝宗の媾和

第五節 既にして、金の廢帝亮、熙宗を弒して、自ら帝位に上ほり、都を燕京に遷して、天下を一統せんと欲し、宋と和を破りて、再び南侵したりと雖、宋兵強くして、容易に志を得ること能はず、尋で亮は其の下の爲に弒せられたり。世宗之に代りて、帝位に上り、使を遣はして、好を宋に通せり。

時に宋の高宗も亦位を孝宗に譲り、孝宗は銳意恢復を圖りて、北伐の大兵を發したりしが、諸將金軍に破らるゝに及んで、事の全く

韓託胃の妄舉

爲す可らざるを知り、兵備を撤し、地を割きて、再び金と和を結べり。然れども、之に依つて宋は金と君臣の關係を斷ちて、叔姪の國となり、且つ歳幣の銀絹各十萬を減することを得たり。

第六節 孝宗崩じて、寧宗の立つに至り、韓託胃は擁立の功を恃みて、權勢を振ひ、宰相趙汝愚を貶し、朱熹、彭龜年、劉光祖等の諸名士を斥け、大師、平原郡王、平章軍國事となりて、頻りに北方の經營を圖り、偶、蒙古の金を侵すに乗じて、大兵を擧げて北伐せしめしと雖、諸將皆利あらずして、金軍九道より襲ひ來りしかば、帝は止むなく託胃を殺して、其の首を金に送り、遂に和を結んで、歳幣絹三十萬匹、及び犒軍銀三百萬兩を納れ、且つ金宋叔姪の關係を改めて、伯叔の關係となせり。

第五章 金宋の末路

興 蒙古の勃

以下第一
地圖参照

第一節 此時に當つて、蒙古部の主に鐵木眞なる者あり、外蒙古の幹難河上に即位して、成吉思汗と稱せり(西紀千二百六年)。蒙古部は、唐の室韓の一部にして、幹難、克魯倫、兩河の間に遊牧し、世々貢を遼、金に納めたりしが、也速該の出るに及んで、漸く近隣の諸部落を併せたり。也速該死して、鐵木眞嗣ぎ、不世出の雄略を懷き、百戰百勝の兵を動かし、先づ泰赤烏、塔々兒、克烈、蔑里乞等の諸部を降して始めて汗位に上れり。

成吉思汗は尋で鋒を南方に向けて、西夏を襲ひ、西夏和を乞ふに及びて、三道より金を侵し、西京(大同府)を取り、北京(大定府)を陥れ、且つ中都(大興府)を圍みて、將に之を抜かんとせしかば、金の宣宗は南

欠

MISSING

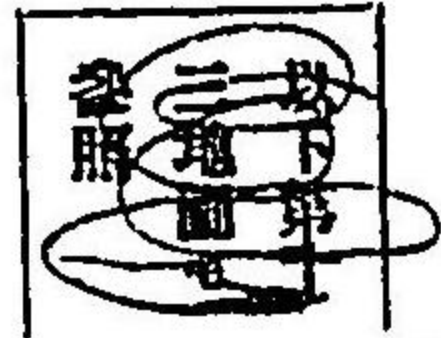
防倭衛所を設けて、之が防禦に充て、宣宗は我と勘合符を授受して、其の患を除かんことを謀りしと雖、倭人の侵入は、尙ほ未だ止まざりき。

殊に世宗の時に至りては、明の海禁稍寛みしと共に、我に在つては偶足利氏の末年に當りたりしかば、倭兵は連年入寇して、廣東、福建、浙江、山東、諸省の沿海を蹂躪し、世宗財武を盡して、之を禦ぎしと雖、其の漸く平定に歸せしは、實に十餘年の後にあり。

第四章 明の末葉

第一節 清の太祖は、姓を愛親覺羅アイシンギョロと稱し、名を奴兒哈赤ヌルハチといへり。神宗の十一年(西紀千五百八十三年)に當りて、始めて兵を滿州の赫圖阿刺ヘクトアラク(興京)に興し、父祖の仇尼堪ニカン、外蘭ウランを伐つて、之を破れり。

愛親覺羅
氏の崛起



時に四隣には、滿州部(五部)、長白部(二部)、東海部(三部)、扈倫部(四部)等の諸部族ありしが、太祖は先づ兵を出して、滿州部及長白部を降し、次に扈倫及蒙古の連合兵を破りて、扈倫の三部を略し、尋いで東海部を併せて、後金皇帝と稱し、更に兵を進めて、明軍を破り、葉赫部(扈倫の一部)を滅し、且つ瀋陽及遼陽を略取せしかば、其の領有、東は海に至り、西は遼河に及び、北は黒龍江に達し、南は朝鮮に接せり。

東林黨議

第二節 明室の大患、斯くの如く目前に迫れるに當り、國內には政黨の軋轢起りて、更に朝政を紛亂せしめたり。初め顧憲成、事によりて神宗に斥けられ、學を東林書院に講じて、傍ら朝政を諷議せしが、不偶の徒及び清流の士は、皆之に響附して、自ら一大民黨となれり。

既にして憲成の、李三戈を薦めて、戸部尙書となさんとするに至り、朝廷の宣、崑二黨と衝突して、互に水火の如く排擠し、始めは東林黨の勝利に歸して、葉向高、顧憲成、趙南星、等皆朝に列せしと雖、趙煥の吏部尙書となるに及びて、非東林黨俄に勢を生じ、悉く東林黨を斥けて、國政を自黨の手に集めたり。

後ち神宗崩して、光宗嗣ぎ、光宗亦忽ち崩じて、喜宗之に代はるに至り、東林黨は、三按(挺擊、紅丸、移宮)を主として、再び勢力を朝廷に收めたりしが、反對黨は、宦者魏忠賢と結托して、其の内閣を破り、所謂邪人名簿なる者を作りて、殺戮禁囚を恣にせり。

第三節 毅宗の時に至り、魏賢(忠)及び其黨與は、悉く貶殺せられ、黨人跋扈の難は、消滅せしと雖、延安の張獻忠、及米脂の李自成は、同時に山西より起りて、流賊の長となり、頻りに諸方を侵して、天下の大患をなせり。但し其の初めに當つては、自成等勢ひ尙ほ未だ

李自成及張獻忠の叛

弱く、幾度か官軍の爲に撃破せられて、或は降り、或は叛きしと雖、十有餘年を経るに及んで軍勢漸く當り難く、陝西地方は云ふに及ばず、四川、湖廣、河南等の諸省に至る迄、皆其の害を被らざるはなきに至れり。

毅宗の末年に至り、猷忠は病を以て死せしといへども、自成は益強盛にして、西安に據つて、大順王と稱し、遂に北侵して、京師に迫りしが、官軍利あらずして、帝は煤山に自刳し、自成は太子を慮にして、自ら帝位に上れり。

第四節 是より先き、滿州に在つては、太祖既に崩じて、太宗之に代はり、西は元の後裔察哈爾部を伐つて、蒙古傳國の玉璽を收め、南は朝鮮を降して、始めて國號を清と改め、又屢明を侵して、河北、山東の七十餘郡を蹂躪し、黑龍江北の索倫も、賀蘭山下の蒙古人も、皆等

清人の南
下

しく其の威命を奉するに至れり。西紀千六百四十四年、太宗崩じて、世祖嗣立し、父祖の遺志を繼ぎて、大に南伐の師を興し、睿親王多爾克をして、之を率ひて遼河に次せしめたり。

時に明の北京は、李自成の爲に迫られしを以て、對清の將吳三桂は急に軍を收めて、之が援に向ひたりしが、遂にして京城既に陥りて、毅宗煤山に崩御せりと聞き、乃ち喪を發して、清に降り、其援を請ふて、専ら内賊自成の討滅を謀れり。是に於て、清は直に其の請を納れ、多爾克をして三桂と共に進んで、自成を破らしめ、自成西走して、陝西に入るに至り、世祖は都を北京に遷して、悉く河北の地を定め、つ自成を潼關に破つて、全く其の師を滅せり。

第五節 斯くて、天下は殆ど清に歸せしと雖、明人尙ほ福王を南京に立て、敢て清に降らざりしかば、世祖は兵を遣はして、之を陷

明の滅亡

れ、福王を蕪湖に虜にし、悉く杭州以北の地を定めて、嚴に剃髮の令を布けり。

然るに、明の遺臣之に屈せずして、更に唐王を福州に立て、魯王は紹興に在りて、之に應じ、陳子龍、吳易、盧象觀、閻應元等亦並び起りて、江西、浙江、福建等の諸地を固守せしかば、世祖は諸將を分遣して、西は四川を平げ、東は浙江、江西を降し、遂に福州に迫りて、唐王を汀州に捕へ、魯王を逐つて、厦門に走らしめたり。

是に於て、鄭成功は、魯王を厦門に奉じ、其軍勢一時は四方に振ひて、鎮江、南京等も再び其の有に歸したりしが、久しからずして、清兵は之を破つて、臺灣に逐へり。

第五章 元明の文化

儒學

第一節 元の儒學は、新生面を開きしにあらず、唯だ姚樞、許衡、吳澄、許謙等ありて、程朱の學を傳紹せしに過ぎざりしが、明に至りて、太祖は大に學校の制を整へ、成祖は四書大全、五經大全、性理大全等を作らしめて、之を大小の學校に配附せしかば、儒學漸く振ひて、遂に姚江、河東の二學派を生ずるに至れり。河東派の祖は、薛瑄にして、姚江派の祖は、有名なる王陽明なり。瑄は醇儒にして、偏に程朱を祖述し、躬行復性を以て、主眼となし、と雖、陽明は之に反じて、陸象山に基きて、更に一機軸を出し、良知、良能を以て主眼となせり。

第二節 元の詩文は、見るべき者少しと雖、戲曲、小説は、此頃より文學の一要素となれり。當時、戲曲には、南北の兩曲あり、南曲は高

文學

則誠の琵琶記を首とし、北曲は王實甫の西廂記を冠とせり。又小説には、施耐庵の水滸傳ありて、結構、文字共に千古に冠絶せり。明に至りては、詩文大に振ひて、宋濂、劉基、方孝孺、高啓、李東陽、李燮龍、王世貞等の諸家を出し、戯曲小説も亦盛に行れて、西遊記、金瓶梅等の奇書を出せり。

喇嘛教の發達

第三節 喇嘛教は、佛教の一派にして、祈禱禁咒を主とせる者なり。阿輸迦王の嘗て小乗教を興隆せしめし結果として、印度のチパールは盛なる佛教國となりたりしが、西紀七世紀に至りて、其の餘勢、ヒマラヤ山北の西藏に及び、六百三十二年には、西藏王親ら使を遣はして、經典をチパールに求めしめたり。

斯くて、佛教は、一旦王室の歸依を受けしかば、其後一たび異端の反抗に遇ひて、或は僧侶を逐はれ、或は寺院を毀たれしと雖、教勢敢

て撓まずして、益全國に流行し、殊に千四百十九年以後は、法主は、即ち國王なりしを以て、更に一層の隆盛を加ふるに至れり。而して元の世祖は、西藏を征服するに及び、宗教を利用して、其の民を治むるの策を取り、教主八思巴を以て、帝師となしたりしかば、其の命令は詔勅と並び行はれて、喇嘛教は益振ひ、僧侶は之に乗じて、往々凶暴をなすに至れり。

後ち元亡びて、明の興るに及び、教徒の横暴は漸く止みて、喇嘛教は紅、黄の二派に分裂せり。即ち紅教は、八思巴の開きし者にして、紅衣を着し、黄教は宗喀巴の創めし者にして、黄衣を着せり。宗喀巴の出でし後は、紅教は痛く衰微して、黄教は益國中に流行し、其の死するに及んでは、達賴喇嘛及び班禪喇嘛の兩弟子、各其の統を受け、爾後は化身轉生を以て、世々之を傳へたり。

基督教の再傳

第四節 基督教は、曾て景教と稱して唐に入り、武宗の時、佛教と共に斥けられて、全く廢絶せしが、元に至りて、再び東流して、中國に入れり。蓋し元の諸帝は、歴世宗教に對しては、一視同仁の主義を執り、若し歐人にして、仕を求むれば、則ち之を任用して、政務を委ね、若し歐僧にして、布教を圖れば、則ち之を優遇して、寺院の建立を許し、爲なり。

但し當時傳來の宗派は、フランシスコ及びキストリウスの二派にして、其の布教も未だ一地方に限りたりしが、明に至りては、海上の交通も大に開け、東西の往來、益頻繁となりしかば、ヂェシウト派及びドミニシア派の僧侶も入り來りて、盛に傳道を試みたり。殊にヂェシウト派のマデオ、リッチの如きは、布教年久しくして、頗る漢文に通じ、神宗に任用せられて、欽天監となれり。

第六章 高麗及朝鮮の消長

高麗と蒙古との關係

第十一及十二地圖 参照

第一節 是より先き、高麗には、李資謙、李義政、崔忠獻、崔瑀等の權臣相次ぎて起り、朝政日に非にして、國力大に衰へたりしかば、契丹の遺種之に乗じて、侵略を謀り、大同江を渡りて、溟州(江原道江陵府)豫州(咸鏡道徳原府)等を陥れたり。時に高麗は、高宗の世にして、殆ど之に報ゆるの策なかりしが、偶、北方より成吉思汗起りて、其の急を救ひ、共に力を併せて、契丹を討滅せしかば、高麗は是より蒙古に歳貢して、其の徳に酬ひたり。而して蒙古は爾後益高麗の國事に干涉して、威を東方に張りしかば、趙暉は、和州(咸鏡道永興府)を以て蒙古に降り、崔坦は、慈悲嶺(黃海道)と平安道との間、以北の地を以て、元に降るに至れり。

元の東寇

第二節 高宗薨じて、元宗の立つに至り、元の世祖は、高麗を介して、日本を招致せしめ、元宗は命に従つて、之を日本に通じたりしが、日本其の招に應ぜざるに及んで、元は遂に東寇の大師を出せり、國史に文永及弘安の元寇といへる者、即是なり。文永の役に於ては、高麗は兵士八千、船艦九百を發して、元軍と共に我國に入寇せしめたりしが、一夜暴風俄に起りて、全軍敗退せしを以て、世祖は更に再征を期して、征東行中書省を高麗に設け、元宗を以て、其左丞相となせり。

既にして、元宗薨じて、忠烈王立ち、元の公主に尙して、駙馬高麗王に進み、兵士一萬、船艦千五百を出して、弘安の元寇に加はらしめたりしが、暴風復た日本を惠みて、船艦悉く覆没し、高麗の兵は幸にして全滅の厄を免かれしと雖、其の生還せしは、僅に三千なりき。

高麗の衰亡

第三節 忠烈王は、後ち元の甘心を失ひて、元の爲に廢せられ、其後の諸王も、皆元の虐遇を被りて、敢て頭を上ぐる能はざりしが、恭愍王の時に至りて、元室漸く衰頽して、威令國外に行はれざりしかば、始めて元の年號を停めて、其の羈絆を脱せり。然れども、當時高麗は、内には金鏞、辛旽、崔萬生、等の姦臣あり、外には倭寇及び紅頭軍の侵入ありて、國勢益衰微せしかば、明の起るに及んで、復其の正朔を奉ずるに至れり。

然れども辛禍の時に至りて、事に由つて、明を怨み、兵を發して、遼東を攻めしめたりしが、偶李成桂は、崔瑩と共に遣中にありて、鴨綠江より軍を班へし、出師の不可を論じて、瑩を高峯縣(京畿道交河府)に流し、辛禍を江華島に移して、其の子昌を立て、既にして復昌を廢して、恭讓王を立て、遂に其の禪を受けて、朝鮮の太祖となれり。時

朝鮮太祖
の外交

に西紀千二百九十二年なり。

第四節 太祖は斯くして高麗に代はり、使を明に遣はして、國號及び冊封を請ひしかば、明の太祖は、乃ち國號を朝鮮と賜ひ、尋いで冊封使を派して、之を朝鮮王に封ぜしめたり。是に於て、朝鮮は明と密着なる關係を生じ、歴世皆明に奉貢して、偏に恭順の意を表せり。

太祖は、啻に款を明に送りしのみならず、又使聘を通じて、好を日本に修めたり。是より先き、倭寇は黃海及日本海の沿岸に出没して、大に高麗を苦め、朝鮮の興るに及びては、其の害益甚しかりしかば、太祖は使を日本に遣はして、海寇を禁じ、且つ隣好を修めん事を請へり。時に我國は、足利義滿將軍の時代にして、始めは國際上の交通を忌みしと雖、後ち遂に使聘を交換して、共に明の藩王と稱せ

壬辰の亂

り。

第五節 斯くて、朝鮮は、歴世東西二國に通じたりしが、足利氏の末年に至りて、倭寇の甚しきが爲に、日本と絶つて、専ら明に事へ、遂に昭敬王の時に至りて、豊臣秀吉の侵撃を被れり。當時秀吉は、既に國內を平定して、將に威を大陸に張らんと欲し、宗義知をして、先づ朝鮮の來聘を促さしめ、尋で竹島を屠りて、其の力を示したりしかば、昭敬王は、止むなく使聘を秀吉に通ぜしと雖、秀吉之に答書を與へて、征明軍の先鋒を命ずるに及び、大に驚きて、之を明に報じ、且つ邊備を修めて、日兵の來撃を俟てり。

是に於て、秀吉は諸將を遣はして、直に釜山に上陸せしめ、諸將は朝鮮の八道に分進して、京城を攻陥せしかば、昭敬王は義州に走つて、急を明に報じ、明の神宗は李如松を遣はして、之を救はしめ、且つ

沈惟敬に命じて、日軍の動靜を窺はしめたり。斯くて如松は進んで、小西行長を平壤に破りしと雖、幾もなくして小早川隆景の爲に、大に碧蹄館に破られしかば、惟敬は之に乗じて、行長と共に和議を結び、是に於て秀吉は、一旦諸軍を引上げしと雖、既にして條約齟齬して、復兵を朝鮮に送りしかば、後ち其の伏見に薨じて、諸將遂に軍を班すに至る迄、朝鮮半島は、再び化して、修羅場となれり。

第七章 西亞の大勢

第一節 欽察は、西紀千二百四十三年を以て始めて、拔都汗の封ぜられし所にして、横帳の金色なりしに由りて、又金黨（シル、オールド）國ともいへり。其の地、西はカルバチャ山脈に至り、東はシル河の下流に至り、ヴォルガ河畔の薩來に都して、歐亞二州に雄視せり。

欽察國の興亡

第十一地 圖參照

拔都汗死して、子措里答汗嗣ぎ、叔父別兒哥汗更に之に嗣ぎて、國勢益振ひ嘗て基督教徒を虐待して、怨を羅馬法王に結び、其の十字軍を興すに先つて、波蘭に侵入し、直にクラカウを陥れて、歐洲諸國を威嚇せり。別兒哥汗死して、忙哥帖木兒汗嗣ぎ、海都汗及八剌汗と力を合せて、アム河畔の元領を分略し、孫月即別汗に至りては、婚を埃及、都爾格、莫斯科等の諸國と結び、好を歐洲列國の君主に通ぜり。

然れども、其後數世を経て、カルバ汗の時に至り、白黨の圖克達密西汗侵入して、國命を傾け、尋て帖木兒の來寇ありて、金黨は益瓦解の運に向ひ、十五世紀の末には、アストラハン、カザン、クリム等の三國に分れ、アストラハン、十六世紀の初めを以て亡び、カザンは其の中頃を以て亡び、クリムは十八世紀の中頃に至りて亡

察合臺伊
蘭二汗國
の未路

べり。

第二節 察合臺國は、八剌汗の時より、元に畔きて、海都汗に通じ、或はトランスオキシアナを略し、或は伊蘭汗阿八哈を征し、八剌汗の死せし後は、全く海都汗に屬して、共に元に抗したりしが、海都汗死して、其の子察八兒汗の元に降るに及びて、國運漸く傾き、元末には、殆ど四分五裂の有様を呈せり。

次に、伊蘭汗國は、旭烈兀の子孫、世々位を踐みて、元室に忠誠を表し、ガザン汗の時に至りては、内は法度を改め、外は埃及と戦ひ、且つ回基二教を優遇して、好を歐洲列國に通じ、國威一時は歐亞、弗の三洲に振ひたりしが、其の後漸く衰へて、明初に至り、遂に帖木兒の爲に征服せられたり。

第三節 帖木兒は、西紀千三百三十六年を以て、サマルカンドの

帖木兒の
厥起

一郊村に生れ、察合臺國の紊亂に乗じて、先づトランスオキシアナを定め、尋で兵を出して、カシガル、カリズム、ユラサン、等の地を定め、遂に伊蘭汗國を滅して、西亞の大半を併せ、北は露西亞を征し、南は印度を侵し、西はオットマン都爾格を討ちて、將に成吉思汗の遺業を服せんとせり。

帖木兒の
北伐

第四節 初め、赤の長子幹兒朶は、裏海、アラル海の間より、烏拉河に至るの地に封ぜられて、國を白黨、又は東方欽察と稱したりしが、十四世紀の半に至りて、トクタミシユ汗あり、曾て帖木兒の援助によりて、汗位を得しにも係らず、後ち欽察に克ちて、露國の諸侯を征服するに及び、帖木兒とホラズムを争ふて、其の領國に侵入せり。

時に帖木兒は、西征の師を率ひて、波斯のイスファハン（イスバハン）

に在りしが、之を聞きて、直に進んで、トクタミシユ汗を、アム河畔に破り、後ち更に兵を整へて、欽察征討の途に上り、波斯、メソポタミヤ、クルヂスタン、ジョルジャ、等の諸地を経て、欽察國に侵入し、立るに之を陥れて、トクタミシユ汗を、キエフに逐ひ、且つ莫斯科及びアストラハンを畧して、國に還れり。

第五節 前編の末章に於て、既に之を概言せしが如く、此頃印度は、トグラク家の治世にして、國都南遷の爲に、人心益王室を離れ、内亂各地に起りて、之を鎮定すること能はざりしが、帖木兒は、之に乗じて、ハンヂャブに侵入し、西紀千三百九十九年の春を以て、大にアリ（特里）を殺掠して還れり。

第六節 是より先き、オットマン都爾格は、蒙古人の爲に、裏海の東岸より逐はれて、小亞細亞に入りたりしが、ムラッド一世の出る

帖木兒の南征

バヂヤゼ
ットの敗

に及んで、其の兵漸く強く、アドリアノーブルを取りて、スレーズに侵入し、子バヂヤゼットに嗣ぎて、兵威益振ひ、マケドニア、セッサリー、希臘、ボスニア、等を略して、將にコンスタンチノーブルに向はんとせり。

此時に當りて、帖木兒は、印度より凱旋し、先づバグダッドの反亂を定めて、シリヤ、埃及、都爾格の三國を討平するの策を畫し、西紀千四百二年を以て、都爾格兵と、小亞細亞のアンゴラに對戦し、大に之を破りて、バヂゼットを生擒せり。

其後帖木兒は、明を侵さんとして、東征の大師を興し、進んでシル河を渡りて、病に罹り、年七十を以て、遂にオトラに死せり、時に西紀千四百五年なり。

第八章 南亞諸國の變遷

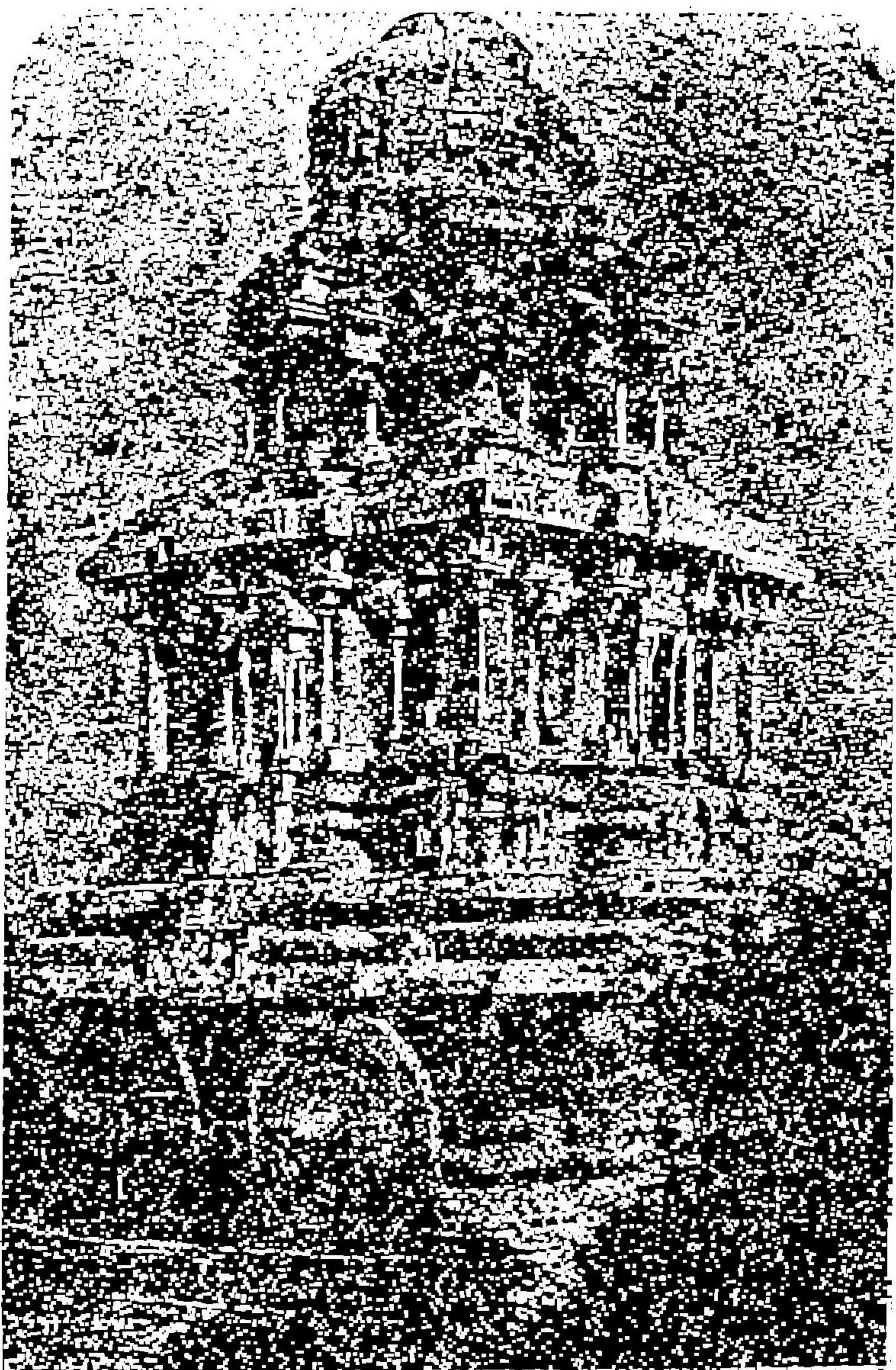
莫臥兒帝國の興起

第四及第十一地圖
邊照

亞克婆爾帝の政略

第一節 帖木兒の去りし後、印度は大に混亂を極め、トグラク朝亡びて、ロデ（路提朝）之に代はり、庶民は其の暴虐に苦み、諸侯は獨立を謀り、遂にハンヂャフの總督度刺路提はカプールに到りて、婆伯爾の來征を請ふに至れり。婆伯爾は帖木兒の玄孫にして、夙に大志を懷き、カプールを根據として、將に祖業を服せんとせしが、印度の衰亂を聞くに及んで、屢之に侵入し、西紀千五百二十六年に至りて、ロデ朝を滅して、莫臥兒帝國を興し、都をデリーに定めて、北天竺に君臨せり。

第二節 婆伯爾帝崩じて、太子弗馬暗帝位を嗣き、反徒各地に蜂起して、國力痛く衰弱せしが、帝崩じて、太子亞克婆爾の立つに至り、



婆伯爾の遺業を恢復して、更に中天竺及東天竺の全部を平げ、都を
アグラに遷して、専ら國民の撫育を圖れり。

印度人は、素と宗教的の國民なるを以て、回教徒の入り來りて、國
を統御すること、當時既に五百年に及びしと雖、ラヂプト人は尙
ほ婆羅門教を奉じて、之に反抗したりしが、亞克婆爾帝は治國の秘
術を了りて、信教の自由を許し、非回教税を廢して、頻りに婆羅門教
徒を登庸し、且つ務めて國民の古風、舊慣を保存したりしかば、印度
人は皆帝の治下に悅服して、帝に奉ずるに大帝の號を以てせり。

第三節 亞克婆爾帝崩じて、太子西利牟嗣き、父の遺業を順守し
て、世界征服者の尊號を受けたり。西利牟帝崩じて、太子澳蘭具塞
布嗣ぎ、英略父に勝りて、南天竺を平定し、都をデリーに復して、宇
宙征服の尊號を得たり。

莫臥兒帝
國の末葉

然れども、帝は亞克婆爾帝の政策に反して、非回教税を復したりしかば、ラヂプト人は之を怨みて、竊にマーラッタ同盟を結び、帝の崩ずると共に、南天竺に起りて、各地の反徒を煽動し、波斯のナダル、シャーは、之に乗じて、來つて、テリーを殺掠し、阿富汗斯坦のアマッド、シャーも、亦尋いて來つて、テリー及びチャムナ河谷を蹂躙せしかば、莫臥兒帝國は遂に衰弱して、諸侯其の命を奉ぜざるに至れり。

第四節 安南は、古へ交趾、南交の二部に分れ、越裳氏の時より、既に来つて、周に朝せり。秦の始皇帝は、之を略定して、象郡となし、漢興るに及んで、高帝は趙佗を封じて、南越王となしたりしが、武帝は之を滅して、其地を分ちて郡となせり。光武の時、交趾反して、馬援之を平げ、三國に至りて、吳は九眞及日南の叛を平げ、吳の亡びし後

安南の上世

第五、第六、第七、第九、第十一地圖
參照

李陳兩氏の朝

は、晋之を承けて、宋、齊、梁、陳、隋、唐の六朝に傳へ、特に唐は、之に安南都護府を置きて、益中國の治を布きたりしが、五代の時に至りて、吳權自立して、始めて中國の治を離れ、後ち丁部領之に代りて、宋の太祖より、交趾郡王に封ぜられたり。

第五節 是より先き、扶南及び林邑にも、各自立の國王ありて、唐の頃より、扶南は眞臘と稱し、林邑は占城と號したりしが、李氏の交都(今の東京)に據りて、大越國を建つるに至り、二國は其の討滅する所となりて、占臘といへり。然れども、後幾もなくして、陳氏は李氏に代つて、王位を繼ぎ、宋元二國の封を歴受して、安南國王となりしかば、占臘は再び其の舊に復して、各元の封爵を受け、元は安南行省を設けて、三國を統御せり。

後ち元亡びて、明興るに至り、安南に胡季犛なる者ありて、國王日

焜を弑し、自ら大虞王と稱して、明の封爵を受けたりしが、日焜の子天平明に至りて、實を成祖に訴ふるに及び、成祖は兵を遣はして、之を討滅せしめ、悉く其の地を收めて、十七府に分ち、度趾布征司を置きて、其の内政に當らしめたり。

黎氏の朝

第六節 然るに、成祖の任用せし知府中に、黎利といへる者あり、成祖の末年より、反旗を翻して、明軍を破り、遂に陳日高を奉じて、外藩たらんことを宣宗に請ひしかば、宣宗は止むなく之を許して、日高を安南國王に封じたりしが、幾もなくして、利は日高を廢して、自ら大越皇帝と稱し、東京に都して、順天と改元せり。

其後大越は、益強く、或は占城を滅して、之を廣南、順化、占城の三州となし、或は老樞を伐つて、其の大半を占領せしが、明の世宗の時に至りて、莫登庸なる者起り、帝位を篡奪して、黎氏を老樞に逐ひ、尋で

暹羅の沿革

第一地圖
参照

世宗の來伐を恐れて、帝號を去り、明に内附して、安南都統使となり、子孫相承けて、黎氏の大敵となれり。

第七節 暹羅は、古へ老樞、暹、及び羅斛の三國に分れ、隋の時に至りて、始めて中國に通せり。當時羅斛は、瞿曇氏國王たりしが、唐の初めに及びて、革命起り、李羅隆亞王立ちて、國を羅越といへり。斯くて元の末世に至り、更に革命ありて、新王立ち、暹國を併せて、國號を暹羅と稱したりしが、後ち使を遣はして、明の封爵を請ふに及び、太祖は之を封じて暹羅國王となせり。

明末に當りて、日本の朱印船は、安南、占城、甘蒲塞、等に往來し、暹羅にも日本街ありて、數多の日本人之に住居せしが、中に山田長政なる者ありて、國王に登庸せられ、屢戰功を立て、逸比留(馬來半島に在り)侯に封ぜられ、尋で右相丞より、第二王に進みたりしが、左相丞

緬甸の沿革

第一地圖
及第十三
地圖參照

高漢と隙を生じて、遂に其の毒殺する所となれり。

第八節 緬甸は、漢には掸國と稱し、唐には驃國と號し、宋に至りて、始めて緬國といへり。甸は、即ち其の部族の名にして、分つて大甸、小甸となせり。元の初めに至りて、世祖は使を遣はして、其の内屬を諭し、と雖、國王敢て命を奉ぜざりしかば、世祖は乃ち之を三征して、國都を陥れ、王の降を請ふに及んで、更に封じて、緬甸王となせり。然るに、後ち幾もなくして、王弟篡奪を謀りて、國內大に亂れたりしかば、元は之を定めて、宣慰司を置き、明も亦元の舊に依りて、宣慰使司を置き、國王を以て、其の使に補せり。其の後、緬王は怒江上流の土族と戦ひて、孟養、木邦、隴川、老撾、等を平げ、遂に進んで、明の邊境を侵すに至りたりしが、尋で國內分裂して、阿瓦、阿臘干、毘牛の三國となれり。

第六編 清初より現時にいたる

第一章 康熙乾隆二帝の雄圖

三藩の叛

第一節 世祖は、明を滅し、後、僅に二年にして崩じ、聖祖之に嗣ぎて、大に清の國礎を堅ふせり。所謂康熙皇帝即是なり。帝の幼年に於て、先づ記すべきを、三藩の叛とす。三藩とは、平西(雲南)靖南(福建)平南(廣東)の三王にして、皆嘗て清に降りて、其の封を受けし者なり。初め平南王尙可喜の老病の故を以て、藩籍を奉還するや、平西王吳三桂、及靖南王耿精忠の二人は、之を聞きて自ら安ずる能はず、朝旨の存する所を窺はんとして、試に平南王の例に倣はんこと

以下第十
二及第十
三地圖參
照

を請ひたりしが、帝之を察せずして、其の請を納るゝに至り、吳三桂は先づ先づ反して、雲南、貴州、四川、湖南の諸省を侵略せり、是に於て、帝は平南及び靖南の二王を復し、直に諸將を派して、三桂を討たしめしと雖、耿精忠は尋で叛きて、福建、廣西の二省を略し、陝西の提督王輔臣は、其の任地を以て、賊軍に應じ、臺灣の鄭經は、精忠の請によりて、福建に現はれ、尙可喜の子之信は、廣東を以て、三桂に通ぜり、然れども、是より賊勢漸く衰へて、官軍頻りに其の侵地を恢復し、輔臣、精忠、之信の三人は、皆降を請ひ、三桂は病みて永興に卒せり、是に於て、賊は三桂の孫世璠を迎立せしと雖、官軍之を滇城に圍みて、遂に自殺せしめたり、時に西紀千六百十一年なり、

臺灣の平定

第二節 臺灣は、嘗て鄭成功の魯王を奉ぜし所なり、王と成功とは、共に幾もなくして死せしと雖、成功の子經、尙ほ之を保有して、

清に降らず、特に三藩の亂起るに及んでは、其の將劉國軒と共に福建、廣東、二省の沿岸を侵略せしかば、帝は先づ諸將を遣はして、之を撃退せしめ、尋で水師提督施琅をして、水師二萬を以て、臺灣に向はしめたり、時に經は既に死して、子克塽之に嗣ぎたりしが、衆寡敵す可らざるを知りて、國軒と共に軍門に降れり、是に於て、臺灣は全く清の治下に歸せり、時に西紀千六百八十三年なり、

外蒙古の平定

第三節 帝は三藩の叛を平げて、臺灣を降すに至り、先づ露國と交渉を開きて、其の南侵を拒ぎ、(後章に明なり)更に力を西北に注ぎて、外蒙古及び西藏を略定せり、

外蒙古は、素と元の後裔土謝圖汗の領有にして、土謝圖汗は、其の族車臣汗及札薩克圖汗と共に、之を分治せしが、厄魯特の準噶爾部(伊犁)より、噶爾丹なる者起り、青海及び回部を併せて、遂に外蒙古に

西藏の平定

侵入するに及び、三汗は走つて清に投ぜり。
 噶爾丹は、嘗に外蒙古を奪略せしのみならず、三汗を逐ふを名として、來つて内蒙古を侵ししかば、帝は親征して、大に其の兵を昭莫多に破れり。時に噶爾丹は、外征日久しくして、舊土伊犁は、姪策妄拉布坦に併せられ、回部及青海も、亦皆離畔して、殆ど身を寄するに所なかりしかば、清兵の重ねて之を追窮するに至り、自から毒を仰ぎて死せり。是に於て、阿爾泰山以東は、悉く清の版圖に入れり。
 時に西紀千六百九十七年なり。
 第四節 其後、策妄拉布坦は、自から準噶爾汗と稱して、厄魯特の一部(合せて四部あり)を併せ、兵を遣はして、西藏の拉藏汗を襲殺せしかば、帝は傳爾丹、噶爾弼等の諸將を派して、東北二面より、同時に西藏に向はしめ、悉く厄魯特の兵を掃らひて、達、敕喇嘛を封じ、且つ

準噶爾の平定

拉藏汗の舊臣二人を擧げて、前藏、後藏を分治せしめたり。(西紀千七百二十年)
 第五節 斯くて、清の國威は、東南二方より、漸く準噶爾に迫りしにも係らず、準噶爾汗は、尙ほ之に屈せず、世宗の初年には、青海の主(清に叛きて逐はれし者なり)を擁護して、清廷の感情を害し、殊に策妄拉布坦死して、其の子策零の嗣ぐに至りては、益狡黠にして、屢邊境に來寇せしかば、世宗は乃ち意を失して、征討の師を出せり。然れども、當時は準噶爾の兵猶ほ極めて強盛にして、清軍多くは敗退し、交戦前後六年に至るも、猶ほ之を降すこと能はざりしが、高宗乾隆帝の立つに及んで、始めて宿望を達することを得たり。
 時に、策零既に死して、達瓦齊汗位にありしが、其の族阿睦撒納之と合はずして、來つて準噶爾の取るべき狀を奏せしかば、帝は之を

機として班第永常の二將を遣はせり。二將は東南兩路より直に之に撃入せしかば、達瓦齊は敗走して、烏什に到り、其の主霍吉斯の爲に捕へられ、遂に清軍に交附せられたり。是に於て、準噶爾は一旦平定せしと雖、阿睦撒納は尋で叛きて、之を奪ひ、駐防の清兵を破りて、將軍班策を殺し、かば、帝は重ねて兵を出して、之を討滅せしめたり。時に西紀千七百五十七年なり。

第六節 喀什噶爾汗の子博羅尼都及び霍人集占の二人は、嘗て清軍に救はれて、其舊都を恢復することを得しと雖も、阿睦撒納の事を擧ぐに當りて、霍集占は伊犁に在りて、之に通じ、既にして其の敗死するに及び、國に歸りて、兄博羅尼都と共に、反旗を翻せり。是に於て、帝は兆惠を遣はして、之を伐たしめたり。兆惠乃ち阿克蘇の副將富徳と共に、并び進んで、大に兄弟二人を撃破せしかば、二

回部の平定

第十一地
圖中參照

緬甸及安南の二役

人は西奔して、遂に土族の爲に擒殺せられたり。時に西紀千七百六十二年なり。

是に於て、清の威命は、葱嶺以西に振ひ、布魯特、哈薩克、愛烏罕、浩罕、巴達克山等の諸族、皆使を遣はして、朝貢するに至れり。

第七節 帝は、西北諸國を平定するに及んで、更に力を南方に轉じ、緬甸を屈し、金川を征し、臺灣を平げ、安南を伐てり。今ま左に緬甸及安南の二役を略述せん。

緬甸は、夙に欸を清に送りたりしが、雍籍牙の王位を篡奪するに及びて、屢邊境に侵入せしかば、帝は先づ明瑞を遣はして、之を伐たしめ、明瑞戰死するに至りて、更に傅恒を遣して、大に敵兵を金沙江上に破らしめたり。是に於て、緬甸は使を遣はして、和議を請へり。安南は、此頃大越王黎維祁の治世なりしが、阮惠なる者起りて、之

を廢して、自ら東京王と稱するに至り、維那使を遣はして、援を清に請ひしかば、帝は孫士毅等を遣はし、阮惠を討つて、維那を復位せしめたり。但し其後阮惠は再び起りて、東京王と稱し、清兵の再撃を恐れて遂に其封を請へり。

第二章 乾隆以後の清朝

第一節 若し過去の歴史に由りて、之を概言すれば、清朝の勢威は、乾隆帝の時に至りて、全く其の極に達し、以後は漸く萎微して、歴世唯祖業を退守するに過ぎずといふべし。乾隆の末年より、白蓮教徒中、不軌を謀りて、追捕せられし者ありたりしが、仁宗の初年に至りて、其の徒再び湖北に起り、遂に河南、四川、陝西、甘肅等の諸省を攪亂し、騷擾七年の久しきに亘れり。

内亂の蜂起

鴉片戦争

其の後南山には新兵の暴動あり、閩、粵、臺灣の地方には、海賊蔡牽及朱潰の寇あり、仁宗の末年より宣宗の初年にかけては、更に回部の大亂起れり。初め博羅、尼都の孫張格爾、清兵の捕獲を免れて、走つて浩罕に在り、回部の教徒と通じて、屢邊に入寇せしが、宣宗の世に至りて、布魯特及び浩罕の尊長と共に、大舉して喀什噶爾に迫り、將軍慶祥を逐つて、葉爾羌、和闐等を取れり。是に於て、宣宗は、陝、甘の總督楊遇春を遣はして、之を擊攘せしめしかば、張格爾は噶年にして、生擒せられしと雖、浩罕は尙ほ數年の間敵意を挾めり。

第二節 英人は、明の頃より、既に支那に通じ、清に至りては、其の貿易益盛にして、頻りに印度より鴉片を輸入せしかば、宣宗は林則徐を廣東總督に任じて、之が防禦を計らしめ、則徐は廣東に到りて、英商に嚴談し、悉く其の所有せる鴉片を出さしめて、之を燒却し、且

つ令を發して、堅く英人の通商を斷てり。

是に於て、英人は軍艦を派遣して、通商を復せんことを求め、則徐之に應ぜざるに及んで、廣東、香港、舟山、乍浦、寧波、等を攻撃して、直に和議を北京政府に通ぜり。宣宗仍て則徐を斥けて、全權大臣を廣東に遣はし、と雖、英人竊に浙江及び廣東を侵して、和遂に成らざりしかば、帝は再び則徐を起用し、皇弟綿璉親王を遣はして、廣東を恢復せしめたり。

然れども、英兵尋で大に到り、厦門を取り、定海を略し、勢に乗じて、鎮海、乍浦、吳淞、鎮江、等を陥れしかば、帝は止むなく伊里布、耆英の二人を南京に遣はして、英將と和を議せしめ、償金二千六百萬兩を出し、香港を英國に割讓し、且つ廣州、福州、寧波、厦門、上海の五港を開きて、互市場となせり。

長髮賊の亂

第三節 鴉片の戦後、粵西には凶歲打續きて、盜賊各地に蜂起せしが、宣宗の末年に至りて、廣西の桂平縣より、洪秀全といへる者起り、天主教を利用して、愚民を誘導し、兵威漸く振ふに及んで、自ら大平天國王と稱し、馮雲山、楊秀清、韋昌輝等の諸將を率ひて、岳州、漢陽、安慶、金陵、等を陥れ、遂に府を金陵に開きて、持久の計をなせり。

時に宣宗既に崩して、文宗位に在り、林則徐、賽尙阿等の諸將を派出して、之を討たしめしと雖、一人として、能く功を奏する者なく、獨り曾國藩は湘郷に在りて、鄉勇を募り、堅く湖南を保持して、武昌、漢陽、九江、等を復したりしが、楊秀清尋で之を下志しを以て、賊軍再び猖獗を極め、江岸の諸州は云ふに及ばず、安徽、河南より、山西、直隸の諸省に至る迄、皆其の難を被らざるはなきに至れり。

既にして、賊軍中に内訌起り、秀全其の將秀清及び昌輝を殺した

りしかば、胡林翼之に乗じて、國藩と力を合せ、再び漢陽、武昌を復し、楊州、鎮江も亦久しからずして、官軍の手中に歸せり。然れども賊將陳玉成及石達開の二人は、尙ほ強盛にして、頻りに官軍を破り、秀全も金陵の官兵を退けて、師を上海に出し、かば、上海の官民大に驚きて、外國の兵を借らんことを、北京に申請せり。

此時、文宗偶崩じて、穆宗位に即きしが、其の請を納れて、援を外人に求めしかば、英、米、佛の三國は、相協議して、之を援け、殊に米人華爾持及英人戈登の二人は、共に全力を奮つて、常勝軍に將たりしより、官軍益勢を得て、曾國藩、李鴻章、曾國荃等も皆屢勝を奏し、玉成、達開の二人は、共に生擒せられ、秀全は自ら毒死して、十六年來の大亂、茲に始めて平定せり、時に西紀千八百六十四年なり。穆宗乃ち功を賞して、曾國藩に侯爵を授け、曾國荃及李鴻章に伯

英佛同盟
軍の來寇

爵を與へたり。

第四節 是より先き、長髮の盛なりし時に當りて、英人は廣東の府吏と葛藤を生じたりしが、英國の領事パークスは之に乗じて、佛、露、米の三國を誘ひ、先づ武力を以て、廣東を略し、更に天津に進んで、清廷をして、新に通商條約を訂結せしめたり。(西紀千八百五十八年) 其の翌年に至り、英、佛二國の使臣は、各批准條約交換の爲に艦を同ふして、北京に赴き、將に白河に入らんとするに及んで、河口の砲臺より砲撃せられしかば、英、佛二國は、直に同盟軍を作りて、直隸灣を衝き、北塘及び太沽を陥れて、天津に進み、清廷の和議を排し、親王僧格林沁の兵を破りて、遂に北京に入れり。

時に文宗は既に逃れて、熱河に在り、恭親王を遣して、頻りに和議を求めしめ、露國公使亦其間に入りて、調停に奔走せしかば、同盟軍